明治三十二年二月二十二日發兌

女鑑

第百七十五號

東京國光社

女鑑第百七拾五號

目録

勝浦屋太郎兵衛の女





濱田智惠子の肖像

春のいさなみ

一日の計は朝にあり、一年の計は春にあり、一生の計は壯時にありとかや、げに物はじめあらずして、終りある事なし、朝に夙くいとなまずして、一日の計何かはたたむ。時はいま春になりぬと、み雪降る遠き山邊に霞たなびき、梅は白妙の袖なつかしく咲きこぼれ、柳はみどりの糸床しうより、やがては鶯も谷の門を出でゝ歌ふべく、ひばりもあがるべく、百千鳥もさへづるべく、桃も笑へばさくらも匂ひ、すみれも色に出では、つばなもひかるべく、殘んの雪の下のさわらびもやがては崩え出づべく、淺みどり淺き野も、深みどり深き山も、玉ぼこの道の芝草までなべてうらわかみ、八島八千島の分ちなく、うら／＼と霞なびき、見亘せば見わたすかぎり、柳櫻こぎまぜ春の錦と飾り、野邊や、塵芥や、生物の存する處、何處も春ならざる

はなく、錦ならざるはなし、三春の行樂、はる〳〵と思へば、げに數へ盡すべうもあらず、而して此の春時、いとなまず、たゞ櫻のいろに誇り、若草のわかきに任せて、直き敎もうけず、一年の計をもなさゞらむには、やがてよもぎのみだれも苦しく、色も實もなき悲しき秋にこそは遭ふらめ、孃たちもやがて春時、花のつぼみ、鶯の雛、若草の綠、之より色をも咲かせ、實をも結ばせ、うつくしき音をも立て、やがては深みどり、たぐるべき身なり。此の春時、春雨のよきめぐみをうけ、よき人のよき音をきゝ、あさがつみ直ぐなる人の敎をうけ、朝にとく道を聞き、夕におそく省みてこそ、賢きよりかしこきに移り、良妻とも賢母ともなり、人の中なる人となり得らるべけれ。さるをいたづらにわかきにまかせて、たゞ糸遊のうら〳〵と遊びのみし、色にほこり、香にほこり、あた櫻夜半のあらしをも思はず、若草の芽出しを愼しまざらは、やがて萎草のいたづらものとなりて、刈らまほしき心地せらるべし。げに三省すべし、四省すべし、少時そまりやすき事白糸の如く、而してうつくしき方にそまるは難くして、ともすれば汚れやすきものなり。げに省るべし、省る

べし、春時は勵みがたく、すさみ安き者なり。あはれ、孃たち、やがて國家の母たるべき孃たちよ、花は散らぬほどにめで、鳥の聲さびぬほどに聞き、賢を賢とし、夙にまづ道を聞き、夕べに之を省みて、とく春のいとなみをなしおかずは、うつくしき人の身となる事また難かるべし。げにつゝしむべきは人生の春なり。

論説



今後の女子が國家に對する覺悟

白松園主人

家にありて、賢母良妻たらんとする者は、また國家に對する、覺悟なかる可らず。今後の女子が、國家に對する覺悟とは、何をいふか。他なし、歴史をよんで、國體を知るにあり。故いかにとなれば、方今、物質的文明の、増進するに從ひて、國民が國家に對する精神の衰廢、益々其度を高めんとす。彼の諺に、家を抱いて、臭きを忘るといふは己れの陋を、知らざるをいふことながら、有形の美にのみ眩惑して、顧みておのれが美の、

比類なきを知らざるをば、之を何にか例へん。近來かゝる痴者の、漸く多くなりて、却りて物識貌するものゝ、うたてあるは、之れ皆、亡國の徒なるをいかゞはせん。抑々物質的の文明は、いかに燦然たらんも、國家の主義精神にして、亡ぶることあらんには、やがて其國家は、亡滅せるなり。我國の、海內無比の國體たる所以は、祖宗の明訓を、萬世に維持するにありて、此の祖宗の明訓は、即ち我國家の主義精神なり。されば、此の無形なる主義精神こそ、我國家の、國家たる實なれ、彼の土地人民の如き、有形物は、決して我日本の國家なりとは、云はれざるなり。當時の腐敗學者、動もすれば、此の主義を忘るゝによりて、遂に所謂、痴者の態をなすに至るなりけり。かく、此の主義精神あるを忘るゝは、他なし、過去の歷史を、知らざるに基くなり。當時、かいなでの洋學者流思へらく、明治の文明をなせるは、皆外國志操の、輸入によるなり。我國の過去に於ける、小歷史、小天地、何ぞいふに足らん。たとひ忍んで、學ばんとするも、自ら耻ぢて、學ぶに堪へずと。嗚呼、果して然るか、吾人是に於て、德川時代に於ける、徂徠一派の、腐儒志操を、今一層甚しく、再演せしを見るなり。之れ實に、滔々たる現時の、精神界中の暗潮なるか、眼を轉じて、女子部內の、少しく文學に志す者を見るに、概ね、此の腐敗的暗潮にうたれて、淺薄なる志操を有する者、頗る多し。之れ皆要するに、歷史

的國家の、存在を忘れて、敎育者、其當を失したるに坐するのみ。之れを聞く、西洋各國の如きは、其普通敎育に、其國の開闢史を、授けざるはなく、獨逸の如きは、特に之れをもて、國民の國家的觀念を惹起する、唯一の目的とせりと。彼等の慧眼なる、不完全の歷史なるにも係はらず、其の之れを重んずること、此くの如くなるを、我國人が、此の至寶なる歷史に對して、冷淡なるは、實に悲むべき事にあらずや。露國の如きは、純粹なる國語を、知らざる者は、小學校の敎員に、採用せずと、いふに非ずや。其國の、歷史國語を重んずること、かくの如し。顧みて我國民を視よ、吾人寧ろ、云ふに忍びざるなり。あはれ此の悲む可く、慨す可きの時に生れて、女子たらん者も、豈に一片の考なくして、可ならんや。家內の和合、もとより女子の任、一家の經濟、もとより女子の責なり。され共、之れに增して、大々的責任たるべきものは、家庭敎育を總攬して、未來の國民をつくる處の女子が、國家に對するつとめは、蓋し國體を明にして、幼童の腦底に、日本國家てふ魄魂を、固凝せしむるにあり。さて之を固凝せしむるには、須く、我歷史の精神を、知らざるべからず。されども、神代史以降に於ける、三千載の歷史を、研究するにても、容易のわざに非ず。おのれのいふは、瑣末皮想の事實はおきて、只其大體に通じて、國家の成立を知り、由來淵源を悟るにあり。さては明治の國家の、突如と

して、湧き出でたる者に非ず、過去の歴史より、生れ出でたる者なる事をも、知るに足らん。特に我國語は、歴史上の大立物なり、國體を明にする大寫眞なり、必ず學むずむある可らず。然るに、此の重んずべき、自國の國語歴史をむ、更に知りもせで、内地雜居の、準備なりとかいひて、女子までも、俄に騒ぎ立ちて、英語を學むんとする樣子なるが、之いとかたはら痛く、いとおろかなるわざなり。

彼等の來る者は、よろしく我が國語を學ぶべし、我國人は、ある一部の人を除きては、何ぞ遽々然として、之を學ぶ必要あらんや。知らず、内地雜居後に至りて、自國の語も知らず、自國の歴史も知らで、如何にして、國民の面目を維持せんとするか。平田篤胤翁、嘗つて當時の腐儒を、罵りていはく

今ノ世ノ儒生等ノ學風モ、大カタ、孔子ノ意ニ背クコトノミデ、實ニ歎息ノ至リデゴザル。其レハ本トシ學ブベキ、皇國ノ學ビヲセズ、漢籍ノミヲ學ンデヲルガ、學問ハ、何ノタメニスルコトヽ心得タルカ。都テ學問ノ道ハ、譬ヘ外國ノコトヲ學ブニモ致セ、ソノ學ブ主意ハ、其ノ善事ヲ取テ、此ノ御國ノ御用ニセントテ、學ブコトヂヤニ依テ、マヅ御國ノコトヲ本トシ學ンデ、サテ外國ノ學ビニ及ブガ、順道デゴザル。然ルヲ俗ノ漢學者流ヲ見通スニ、我ガ國ノコトヲ問ハレテモ、知ラズト云フテ、耻トモナント

モ思ハズ、戎國ノコトヲ問ヘバ、知ラヌコトマデ、知ッタ貌ニ申スデゴザル。彼ノ川柳ニモ「虎ノナク、聲ヲキカレテ、儒者コマリ」マタ「魯ノ國ノ、僉議スルマニ、腰カヾミ」トモ申シタハ、儒者ノ此ノ癖ヲ、詰ッタモノデゴザル……………

此の語移して、現今の洋學流者が、規箴とぞすべかめる。されども、只枕草子、源氏物語等の、中古文を讀みて、女子文の、金科玉條なりと心得、女子の學問は、終れりと思ふべからず。中古文をよみなども、又其の變選のさまをも、尋ぬべきなり。大方當時の女子といへども、國家に對するなどの考は、更になく、只一つの和合安樂にて、足れりとするが故に、子女の敎育にも、意見とては更になくて、或るがまゝに任ずるなれども、國民が國家に對する意氣は、次第に、滅却消耗するになん。只蛆の如くに湧き出でゝ、炊飯洗濯に齷齪し、蠢々として世を終り、草木と共に朽ちはつる、下等の女子こそいざ知らね。苟くも、此の靈域に生れて、尋常の婦人たらん者、多少の義務を知らでやは。多少の覺悟なくてやは。

女子敎育不振の眞因（天）

大息子來稿

戊辰の政變を去ること僅かに三十有一年、丁丑の兵革をへだつること纔かに十有一年、女

子教育の僅かに曙光を放つの觀を爲せるは必至の勢也。加之、近時物質的文明の妖雲、層一層の密度を加へ來りたるものゝ如し。かゝる場合に於て最も大なる傷害を被り、又尤も著しき結果を呈するは、女子教育の頽廢より太しきは莫し、以上二者の遠因あり、近因あり、女子教育の不振は、又豈必至の勢たらざらんや、若夫れ半知半解の徒、西洋女權の風を鼓吹し、日本固有の良果を振落せしは、その弊勝て云ふべからざる也。

必ずや、これが不振を挽回せんか、極めて鄭重に、不振の原因を討察し、徐ろに年月の經過を待ち、その規摸は、一局部の觀察に止らずして、大局の大勢に於てし、最も眞摯なる政事家と、極めて純正なる家庭とを得て、始めて功を奏することを見んか。

蓋し政變兵革の後に、女子教育の不振に陷るは、理勢又巳むを得ざるに出づ、請ふ少しくその大梗を云はんか、吾人以らく政變兵革の民は、そのこゝろ風雲に在り、規矩準繩は、彼等の潔とせざる所なり、端視嚴思は、彼等の欲せざる所なり、彼等はいふ、酔ふては、應に美人の膝に眠るべし、醒めては、即ち堂々たる天下の權を握らんと、又以らく官に當ては、吾れ執金吾たるべし、妻を娶つては、必や陰麗華たらんと、これ實に風雲兒の屬性として、爭ふべからざるものたり、唐の李白の詩に越王勾踐破呉歸。宮女如花滿春殿の句あり、あゝ風雲兒の腦裡又豈謹嚴剛直なる思想あらんや、又唯に李白句中

の狂態を夢想するにすぎざるのみ、果して如此んぞ、女子教育の混淆せられ、顛倒せられ、頽壞せらるゝもの、豈大ならざるあらんや。

昔者、陸賈といふものあり、漢の高祖を罵つて云はく、陛下馬上を以て、天下を得たるも、安んぞ馬上を以て、天下を治むるを得んやと、今夫風雲兒、一朝にして、政權を掌握し、天下の事、漸くその緒に就くに及では、秩序の重せざるべからざるあり、教育の振興せざるべからざるあり、往時、大刀躍馬の風は、一變して冠衣束帶の姿を取らざるべからざるに至る、夫然り豈夫れ然らんや、彼れ風雲兒の屬性は、得て消磨し易からず、酔後餘勇を借て、昔時の狂態を演出するは、必至の勢也、彼は、能く口に女子教育の崇重せざるべからざるべからざるをいふ、而かもこれ已むを得ずして、而して後に假裝するのみ、彼れは能く妻兒に對して、嚴正なる道義に出てんと欲す、而かもこれ亦已むを得ずして而して後に僞服するのみ、彼は表に女子教育の振作を喜ぶが如しと雖も、その實はこれを以て太だ迷惑なる、太た厄介なる事情として憚らざる也、あゝこれ豈獨風雲兒時代の男子のみならんや、女子も亦た如此而已矣、吾人故に以らく政變以後の女子教育は、年月に正比例して進歩すべし、現下の女子教育は、その眞意味に於ては、尙消極的の方針に徘徊するものなりと。

大凡天下の事は、千波萬波、前後錯綜して、而し後に結果を形はすものなり、この故に理に於ては、進化すべくして、而かも事實上、退化せるものあり、理に於ては、退化すべくして、而かも事實上進化せるものあり、これこれを時運といふべきか、悲いかな、方今の女子敎育は、年月を追ふて、進歩の景況を見る能はず、而かも包圍的諸因は、或は猛烈なる傷害を逞り、或は死灰を再燃せしめ、女子敎育の眞價値は、その立脚地を並せて、不測の深淵に陷らしめずんば已まざらんとす、吾人は恐る、女子敎育の種子は、期年ならずして、全くその跡を絶滅せらるべきかを、請ふ去て見よ、物質的文明の妖雲は、月を逐ひ年を追ふて、その密度を增生しつゝあるにあらずや。

或人問ふていはく、子か女子敎育の不振をいふは善し、而かも、これを以て、政變を罪するは何ぞやと、これに應じていはく、吾人政變の種類を見るに、大略二あり、その內部的政變に屬するは、內訌となり、その外部的政變に屬するは、遠征となる、蓋し內訌か女子敎育に傷害を與ふるものたるは明かなりと雖も、外部的政變に屬するものゝ多くは、或點に於ては、國家的道德の發達に資すること大なるものあり、これを以て、爲政家の慣用手段として古來多々認識せられたりと雖も、吾人の思意する所を以てすれば、これらの政策たる明かに或部分の犧牲を待つて而して後、纔かにして買得たる結果たる

べし、女子敎育の如きは蓋し犧牲に供せらるゝの最大部分たるや必せり、世上往々戰後經濟の矢算を以て唯一の瘡痍たる如く言說すと雖も、これ唯實に皮想上の見解たるにすぎず、吾人以らく瘡痍の最大なるは唯一の女子敎育にして、經濟實業、諸種の亂調は、又唯これが結果たるにすぎざるのみと、あゝ一得一失は數也、吾人の政變を罪するはそれ將來を勸戒する所以なるか。

女德のしをり（二十二）

三輪田眞佐子

第二身體の保全　人は、心を放逸にし思を邪惡にすることの不德たるを認めざるものなからんも、未だ身體を保全するは一の德たるを知るもの少きめり。熟々考ふるに、宇內萬有中何物か目的なからん、例之は、無情の草木だに、春陽を待ちて新綠を吐き、紅花を着け以て菓實を結び、遂に枯落するを一年の目的とするが如し。若し狂風起りて新綠を拂ひ、紅花を散じて果實を結ぶ期なからしめんか、世にあり甲斐なき草木となりはてん。わきて人類は萬物の長なるものなれど、必ずや高尙なる目的なかるべき、されど不幸にして身體を毀傷し、以て人事の目的を達せず、徒に白骨となりて原野に朽ちんか、則ち天道に背き、亦人道に戻るものと言はざるを得ざるなり。

されどにや、聖賢は身體を全うするを敎へざるはなし。孝經に、身體髮膚これを父母にうけ、毀傷せざることそ孝の始なれとあり。亦小學に、君子は敬せざることなし、身を敬するを大なりとす。身也は親の枝なり、敢て敬せざらんや。その身を敬する能はざるは、これ親を傷ふなり。とあり。これ等の道理は、悉く先哲の實踐せしものなりけり。今實例を擧んに、樂正子春堂を下るとき、その足を傷けゝるが、數日戸を出でず、猶憂色ありけれど、門弟子その次第を問ひけるに、答へけるやう、吾これを曾子に聞く、曾子はこれを夫子に聞きける敎に、天の生ずる所、地の養ふ所、唯人を大なりとす。父母全うしてこれを生み、子全うしてこれを歸すを孝と謂ふべし。その體を虧かず、その身を辱めざるを全うするとこそいふべけれ。故に、君子は頃歩にして敢て孝を忘れざるに、予は今孝の道を忘れしかど憂色あるなりと。亦曾子疾ありけるとき、門弟子を召して曰ひけらく、わが足を啓け、わが手を啓け、詩に云ふ、戰々兢々として深き淵に臨まんが如く、薄き氷を履まんが如く、今にしてわれ免かるゝを知ると。實におのれが、女德に於て身體の保全を説くも、先哲の道を祖述するに過ぎざるなり。

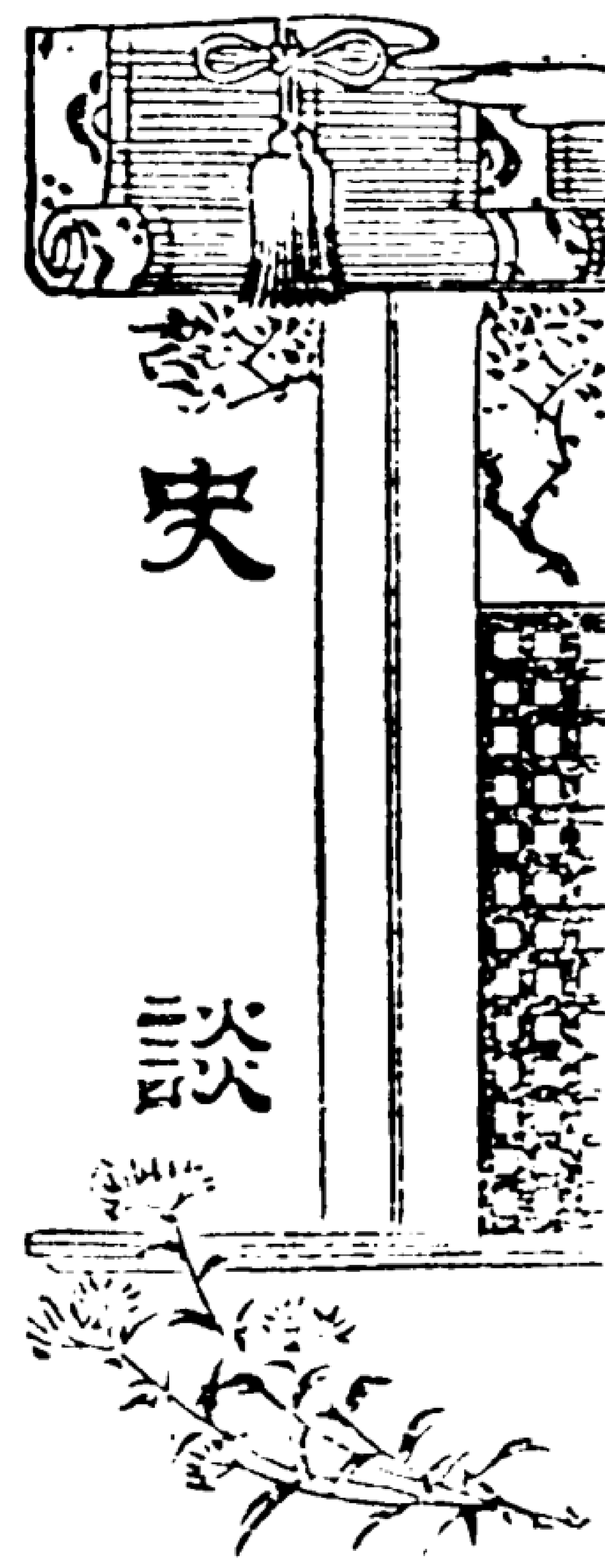
されど、外つ國の婦人が、耳に穴を穿ち以て環を飾り、あるは腰を縮束して形容を作りあるは跛を小にせんため包縛する如き、若くは（アイヌ）の婦人が上唇に刺墨する如きは、

身體を毀傷すること甚しき例にて、道徳に背反するものと言ふべし。凡そ天然の體容を害するものは、悉く女徳の一部を缺ぐ蠻俗ならんかし、文明の女子たるもの、善の善なるものを撰ばざるべからず。

わが國の婦人が、眉を絶ち齒を染むる如きも、身體を毀傷する點より言はゞ、良風にあらざるは明なるも、これまで久しき時代間の習慣となりしを以て、これに背くは、亦國風を破る恐ありけんのみならず。眉と齒の如きは、體幹に殆ど關係あらずして、傍ら二夫にまみゑざる證表ともなりけんを以て、おのれは敢て責むべきものと思はざりけるが、現今は、都會の婦人につきて見れば、最早一般の風俗にあらざる傾向あり。

寡婦となりて髮を斷つわが婦人の風習は如何と言はゞ、髮も亦身體の一部分なりとはいへ、髮を斷たんも身體の勢力を損ずる憂なし、且つ髮を適度に斷つは、處置に便なるを以て、反りて清潔などの益もあり、蓋し髮の長きは、自然より人に文飾の取捨を與へしものならんか、さるに婦人は、良人の死せんとき誰がために文飾せん、唯清潔にして他人に失禮だにせずば足りぬ。昔河内の國なる大井の里に、安住たよ女といふ寡婦ありけり、そは十七才にて嫁ぎけるが、一月越ゑざる間に良人死にければ（筒井筒いづゝの大井の水底にふたりながめし影はわすれじ）と詠みて、雲の如き鬢髮をみづから斷ち、隣里

の女童を敎訓しつゝ、寡居して貞操を守りけりとかや。おのれも二十有餘年のむかし、良人にわかれ寡婦となりけるとき髪を斷ちしは、これを以て反りて女德と信じけれどなり。今後も世の寡婦たるものは、たとひ春秋に富まずとも、斯くこそあれよかし。そもそも松柏と操を競ふもの、などか頭を飾るに及ばん、唯尼となる如きは極端なるのみ。



勝浦屋太郎兵衛の女

鹽井ふく子

頃は元文三年の事なり、津の國浪華に勝浦屋太郎兵衛と云ふ舟子ありけり。常に人のまたつかひて榮えけるが、太郎兵衛一時のあやまり心より、罪をひき出し、一朝天綱にかゝりて、ひとやにつながれ、そのまゝやみの世に渡されんとす。太郎兵衛に、いち、まき、とて二人の娘ありけり。姉はやう／＼十三四歳、みどりの髪まだたぐりこぼるゝふし多かれど、妹は僅に七つ八つのふり分けの童女ながら、かゝると聞きて、いたく悲しみ、姉は殊に一日水も飲まず一夜寢もせで悲しみけるが、つら／＼おもふに、我身は親の賜物、親のつくり給へる身、今わが身をすてゝ、親の命を乞ひてんと思ひ、母その傍らにあらぬを伺ひ、此の事を妹にかたりけるに、妹もたゞ父のみのなづかしさを知るのみ、又己れが身をとはず、夜の明くるを待ち、鳥と共にねぐらを離れ、二人伴れ立ちて、町奉行佐々某の家に至り、我等二人を殺して父を助け給へと泣きて請へり。太郎兵衛また曾て養へる子に長太郎と云ふがあり

けるが、二人が約束を知り、われも子なるに何とては連れぬとてこれも亦自ら町奉行方へ來り、姉妹と同じく、己れを殺して父が罪をゆるさせ給へと云ふに、二女は驚き、あな、御身は男子、殊に養子にして、義理もあり、妾は女子にて、父のみの誠の子なれど、父の爲に命を捨つるなり。御身は殘り居りて、父と母とを養ひてよ何とぞ、吾等二人を殺して、父を助け給へと云ふ。否己れは養子にして、父の恩義も亦格別にて、まして義理ある事なれど、猶更に乞ふなり、何とぞ己れを殺して二女及び父を助けられよと長太郎も乞ひ、互に死を爭ひて止まず、佐々某思ふやう、これらはけなきものゝ心より出でべきことならねど、それ誰か敎へし者ならんとて、其の日はよきに諭して、家に歸らしめ、ひそかに探偵せしめしに、誠に姉弟の心より出でたるにて、兄弟なほ父のみをなつかしみ、夜も晝もいもねであこがれ悲しみ、ゐ堪へず、又や願ひ出でけるに、某いたく其孝心をあはれめど、さりとてゆるべき、罪ならねど、厚く諭して歸らしめむとすれど、三人は悲しみて起んともせず、父の罪、如何にもして助け得ずば、己れ等も亦生きてまつべき空もなしとて、泣き沈み、はては水に入りて果んと、一方ならぬ歎きに、佐々氏もふかくいたみ、父の死刑の期をのべて、其の日は漸く家に歸らしめしが、其後なほ、かはるゞ歎願して止まず、子供ながらやつれしさまの見ゑて、いとゞあはれなるに、佐々氏いたく感じ、三兒が至孝を上に上申し、特典を以て、父太郎兵衞の死刑を赦し、遠流に處して、三兒にあはしめしに、姉弟は父が左右の袖にすがり、むせびにむせびたりと云ふ、孝子が心計り世にあはれのものはあらじな。

赤福餅開業祖濵田智惠子の小傳（承前）

岡田杏次郎

吾が家の家政は此の時に回復せられぬ。母君は其の年

より小兒の教育に心を用ゐられ、父君の遺志をつがしめんとして長子某を神風館の門に托し、又長女某をも寺子屋に通はせられぬ。此の後明治七八年の頃、始めて小學校の設けられし時、次女某をも之に入學させ、又不肖某をも神宮教院にて學ばせられき、扨家妹二人もおひ〳〵成人せしかど、良き人撰みて夫々嫁がしめ給ひぬ。家事漸く整ひ來りて心もやゝおちゐし頃、うたてや母君が年尚若くて寡居せらるゝを見て、或人頻に入夫を勸めけるが、母君は斷乎として謝絶せられ給ひき、此の後再び言ふものなかりしとぞ。扨も貧しき時は顧みるものさへなきを、家少しく整へど惡魔直に其の隙を窺ふ、人情の險惡なる山河の行路難よりも甚しとは又むべなりける。

さても母君がまめ〳〵しく働き給ひけるによりて、家聲やう〳〵遠近に知られける時、こゝに又一種の惡魔ありて狼噬の慾を逞うせんとせりき其は他ならず。吾が家の北隣に大きやかなる店うち開き、軒を列ねて同業を營むものこそあらはれたれ、吾が家貧苦の中に成長して漸く人に知らるゝに方り、端なく此の競爭者を生じけれど、母君の口惜がらせ給ふことは大方ならず。殊に彼の店は吾が家の三倍もかりもありて、一見宗家の如くなれど、吾が家の營業を妨害すること甚しく、却りて吾が家こそ隣家を眞似びて起りし如くに見なされたれ。母君は祖先に對して、面なし。如何にもして此の競爭者に打勝ちてんと、一念專心奮勵せられけれど、敵商終に支ふること能はず、一年有餘にして破產の非運に及びたり。蓋わが商業の薄利なる到底競爭に堪へざりしなり。

年又年と閱し來りて明治もこゝに十年を重ねつ。此の年大洪水あり。五十鈴川氾濫して、吾が家半ど破壞せられぬ。母君はこゝに決心せらるゝところありて、先に競爭せし隣家を購ひ求められ、吾が家に併せて新築せられけり。是やがて今の住家なり。翌年又向隣に一家を求められ、土藏納屋など建築し給ひぬ。吾が家の

基礎こゝに至りて定まれり。

此の後同業者頻々として起るものありと云へども、多くは三四年にして廢業せり。其の今日現存せるものは、敢て吾が家に影響を及ぼすものにはあらざるなり。

以上は唯これ母君が半世の履歴のみ。爾來二十有餘年、その間苦辛經營せられしこと、決して前半に劣らざるなり。然りと云へども、事往々現代の子弟姻親間に屬するを以て、此に明言すること能はず。之を要するに、後半の履歴は、前半創業の後を承けて、事おのづから守成に屬せしを察せられなむ、即足れり。凡そ何事も創業的のことは、人意の表に出づるを以て其の事蹟顯著なれども、守成的の事業は其の行動多くは内部に隱伏するをもて、容易に其の効績を認むる能はず、若それ之を以て、守成は創業に如かずと爲せむ則誤てり。守成の難き、殆創業の難きよりも難し。敢て語らざるのみ。語らむ將に二十餘年來の長悲鳴を發すべきなり。夫たゞ是あり。之を以て緘默するのみ。讀者願くむ此の一篇無字の哀思史を讀みて、多年の經營終によく今日あるを致しゝは、談まことに容易ならざるを看取せらるべきなり。

今や家庭の現狀を記述せんとするに臨み、省みて忸怩として面だに掩ふに堪へざるものあり。願ふに事一私人の家乘に屬すと云へども、斯の名譽を揚げ斯の功勞を效されし父君母君の遺子として、碌々無爲の不肖等を列記せんこと誠に慚懼の至に堪へざるなり。讀者乞ふ其の愚蒙を憐み給へよ。

吾が家兄弟姉妹併せて四人。長子某家業を繼承して父君の名を襲ぎ同じく種助と呼ぶ。目下伊賀鐵道株式會社の監査役たり。姉妹二人各良人に適して兒女膝を繞れり。不肖某出でゝ父君の弟岡田氏を嗣ぎ、之を神宮に奉せり。一族合せて二十有餘人、之に僕婢を加ふれむ殆七十名に及べり。

母君常に語らせ給ひき。吾が商業の斯く繁盛なること、全く太廟參拜者の恩澤なれむ、妄に利慾を貪りて家聲

を墜すべからず。吾が家の營利的事業は何別に在るなり。必之をもて念と爲すこと勿れ。今は唯太廟の下に此の名物赤福餅あることを依襲せしむれど足る。是即父君の遺業を遵守するの道なり。而して又我の志なり。子孫之を以て家憲とせよと。

吾が家の地盤位、ならびに製業品の如何なるものかは、既に赤福亭記に其の一斑を記述したれど、今又左の一絶一詠を以て更に其の風物を明瞭にせんとす。

寄題濱田生所赤福餅　浦田改亭

紫玉生烟臼杵鳴、饞涎不免口頭橫、
價廉貧富同充腹、世上喧傳赤福名、

赤福亭憩ひて　植松有園

やまもよしせのとも淸したび人の
たゞに過ぐべきところならめや

母君の事蹟は大略こゝに盡きぬ。乞ふ筆を轉じて其の性行の一斑を窺はん。

一　母君は實に敬神家なりき。吾が世安けく治りて吾が家業の日々に榮えゆくこと一に皆、太廟の餘慶なりとて、每月一の日には怠りなく參拜せられ、又每年正五九の月々には、兒孫を伴ひ、神樂殿に就きて御饌そなへ奉らるゝ例なりき。

一　父のゆかりとては、家妹二人のみなりしが長妹某は一旦人に嫁ぎしかども、其の夫たりし人、行跡修らずして破產せしかど、終に家に引取りぬ。然るに此の人明治十六年の秦病死せしかど、殘るは唯次妹のみなり。此の妹今は志摩國に住まへるが、父君の妹なれど疎かにおつかはせ給はず。四季折々の音信はもとよりにて、其の音信でとに物など贈らせ給ひて心慰め給ひぬ。又其の女兒をも吾が手許に呼び招ぎて、何くれとなく敎へさせ給へりき。

一　父君の病に罹らせ給ひし時、身をも厭はで看病せられし兄上姉上には、同胞ながら一しは優しく仕へられ、其の子其の孫などには落ちなく調がせ給へり。殊に生家の後れたる兄嫁に仕へさせ給ふことといと

いと懇に常に姉親なりと語らせ給へりき。

一母君も亦父君に讓らざるの慈善家なりき。一年或人の、骨がらみと云へる病にて紀州熊野の温泉に湯治せんとするに、其の旅費なくて泣き悲めるを見て、母君忍び給はず、往復の旅費を與へられたることありき。又一年貧困なる若夫婦の負債に堪へやらで逋走せんとせしを、債主に要せられ、今は進退谷まりて、失望のあまり入水の覺悟なりしが、其れとなく暇乞に來りしに、打開く話の端々に、けしき大方さとられしかど、貧しきながら其の日の賣代を擧げて救助せられけり。此の人七八年前まで存生して松阪町に在りき。時々物などおくりこせり。

蓋父君母君が慈善心に富み給ひしは、もと貧苦の中に成長して、艱難具さに嘗め來りし己が昔に比較せられて、殆他視する能はざるに出でしなり。此等のこと數へてもゆかど、大小輕重の差こそあれ、尙多かりけり。人や知らじな名をぞ云はねど。」母君の慈善心は然ることなから、茲に其の生平の用意を窺ふに足るべき一格言あり。格言とは、嗚呼なれども、吾等子孫が拳々服膺して遺忘すべからざる事なれど、やがて是吾等が爲には格言なりけり。其は他ならず。雇人をいたはり使ふ事にぞある。曰はく「人を使ふは使ふとな思ひそ。我こそ彼に使はるゝなれ」と此の事誰が聞初めけん。冒頭常に母君の名を稱して之を傳唱するものありけり。今母君の直言を直筆すれど「人を使ふのは自分が使はれるのじや」なり。これ實に吾が母君が意中の秘鑰を示されしものにて、曾て吾が一家が病床に呻吟せし時に際し、義僕烈婢の云爲ありし所以も、其の因るところ實に偶然に在らずと謂ふべし。

ことし秋十月、母君突然腦充血を釀して半身不隨の病に罹らせ給ひぬ。一家の悲嘆それはた如何に、醫師數多むかへ、看護及ぶ限り盡したれど、病の激かりしため、終に起たさせ給はざりき。委しきことは別に病床日記に記載せり。病革まるに及びて、一族枕を擁して

侍す。其の將に瞑せられんとするに臨み、擧族期せずして合掌拜伏し　悲泣哀號の聲夜に入りて止まざりき。此に最も憐むべきは、母君の姉上に當らせ給ふ本年七十四歳の老嫗と、吾が兄上の幼子當年十二歳なる孫とが、又相期せずして身を以て代らんことを祈願せしことにぞある。あはれ酸鼻の極になむ。母君が身まからせし訃音一たび傳はるや、弔問せらるゝ人いといと多し。其の國隔ちし人は電報もて、處隔ちし人は郵書又は代人もて、辱知諸君の弔問を忝くせり。又舊僕婢にして近村に散在せるもの、訃を聞きて馳せ集りしもの十數人。其の十里外より來りしもの二人。皆柩の前に俯伏して悽然慟哭す。

嗚呼母君の如き、子としては孝に、婦としては貞に、母としては尤慈なりき。生きて艱難憂苦に家を起し、死して人に惜まるゝこと、今猶昨の如く、一面識なき顧客さへ、時に涙を浮べて弔はせ給ふものあり。他人に在りて尙且然り。況んや多年の養育を受けて人となりしものをや。憾何ぞ休むべけむ。

そもそも、貧しきものは人の憐を惹きやすく、富めるものは人の望を繫け難し。世に孝女と呼ばれ貞女と稱せらるゝもの、多くは是一時危激の人のみ。一旦意滿ち氣驕るに及びては、孝女必しも貞ならず。貞女必しも慈ならず。克く此の始終を通じて其の節操を全くせるもの蓋稀なり。いはけなき申條にはあれど、吾が母君の如きは、人の鏡と仰がるゝ立志篇中の一班を得させ給ふべき婦德を具へさせたりと見しは、まさなき僻目なるか。子として親を敬愛するは人情の常なれど、跡なきこと書き綴りたりとて何かはせん。却りて死後の耻辱と爲るのみ。今かく公けに物せることは、十目の視る所。十手の指す所。嚴として易ふべからざるものなればなり。母君得年六十三。鄕里に生れて鄕里に終らせ給ふ。同胞故舊の存在せるもの尙多し。況んや事蹟に感じて平生嘖々稱嘆するもの多きに於てをや。もしそれ傭筆其の宜しきを失ひ、用墨其の意を盡さゞ

るあらば、不肖謹みて其の罪を謝せんのみ。

明治戊戌窮冬句五

喪中に在りて　不肖　岡田杏次郎　泣血書

洗筆後の所感

今日に方りて既往五十年を追憶すれば、恰も洋々たる一河をたどりて水源を窮むるが如し。或は岩石に阨塞せられて激湍雪を吐き、或は木葉に埋められて浸潤青苔の下を潜り、細流涓々窮つて通じ、小波紋々動きて滙る、登頭終に水なきかと思へば、水は斷壁懸崖の滴露にして、滴一滴聚つて流れ、流れて注ぎ、注ぎて奔り、奔りて終に洋々として海に入れり。海や深し山や高しと雖、いかでか吾が父母の厚恩に及ばん。商海の舟師として一船の舵機を司るの人よ。水なくんば船泛ばざるなり。雨なくんば水生ぜざるなり。天水を與へ、父母之を通じ、吾之に船す。風波險惡、乞ふ操縱の妙を談ずることを休めよ。一たび頭を回らして想を彼の山巓に寄すれば、源泉混々不舍晝夜ものあらん。舟師俯仰行止して其の元を忘るゝなくんば即可なり。

臘月十九忌明の日　不似　杏次郎　又識

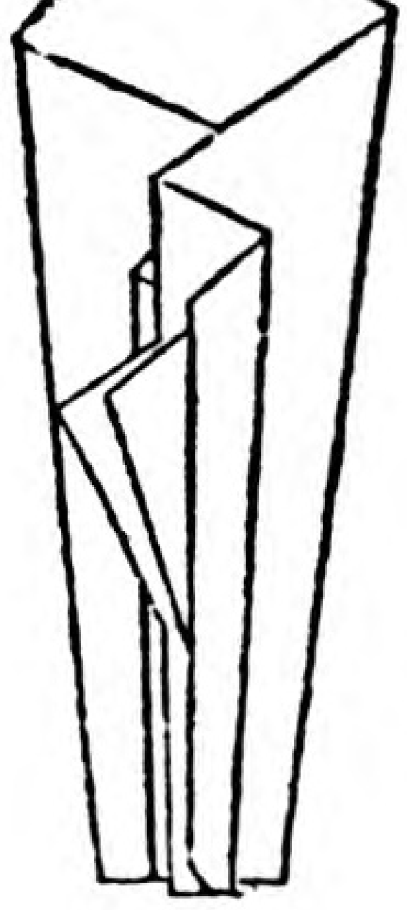


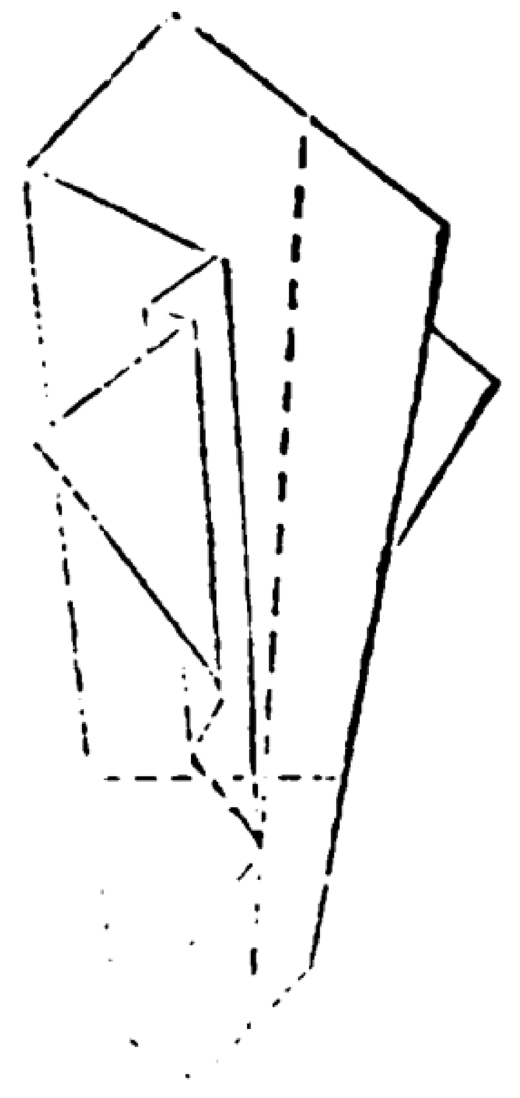
包の記

故有住齊先生敎授

門人　なみ子
鏻子　筆記

髪撫包　紙は角取にて折る、表大奉書、裏紅奉書、にはひをとること常の如し





解の圖

以上ものしたる外、猶此に類したるものいと多けれども、多く今の世に用ゐられざるものなれど、余は省きて、包の記はひとまづこゝに筆をとゞめんとす、讀者乞ふゆるしてよ。なみ子、

茶の湯

茶禮初學

孤峯庵祿仙齋不羨

閲　章雄

偖小座敷にて薄茶も呑せんとならば、亭主出て嘸御退屈に可レ被レ為レ入なれ共、只今炭を直して薄茶を可レ為レ參、寛々御遊を願舛と云て、煙草盆火鉢を差出すべし（但し是は身分に據り通ひの人を以て出すも無レ妨、煙草盆は火入灰吹煙草入、煙管を並列、火入左、灰吹右、烟草入中、烟管は前の方へ横に置べし。火鉢は火筋を添置べし）是は其人の身分により通ひの者を以出すも無レ妨、尚烟草盆、火鉢は、對にあらさるものよし。次に亭主も喫烟家なれば煙草盆を持出し、清淡あるべし。次に亭主立て水屋に入り、炭取持出、炭を直すべし。（但し此炭は初座の炭よりさら／＼とする心持にてすべし、炭取の内も、初座と同様にならざる様、幾分の變更を加ふべし。口傳）扨炭の手續は初炭の時の如き手續なれば爰に畧す、客方も炭を炉邊へ寄りて一覽する事は差違なし。香合は小間にては先不レ替、初坐の香合なれば拜見にも不レ及、夫故亭主は、香合の蓋を除きて持出る抔一興あるべし。炭相濟たらば、薄茶菓子を持出、上客の前へ進め、御取廻しを願ふと云ふて出すべし（但し是は干菓子なり、其品物は、松風の類、或

は打もの〻類見計ひ、其時々の物を出すべし。都て淡薄なる品を好、雖レ然、匂入、又は薬種の入たるものを嫌ふ、婦人の客には紅入物など相當すべし、又在昔は干菓子には箸は不レ付しが、婦婦客には箸を付るも無レ妨、其故は、品物に據、手に付ものもあれど杉揚枝を可レ用、又其菓子器は、漆器、陶器、何にてもよし。又諸流共其宗匠の好物も可レ有）次に水指を持出べし、置付所は濃茶の時の如し、次に薄茶入（但し棗にても、陶磁器の類にても、濃茶入と差合す様にすべし）を右に、茶碗を左に持出すべし（但し此茶碗は濃茶々碗を用ゐるがよし、仕籠方は茶筌、茶杓、茶巾、濃茶の時の如し、水指の前に置合、引入、水翻を持出べし（但し是に仕籠も蓋置を入、柄杓を掛る事如レ例）左手にて持出、茶道口を入りて振向、太鼓張を建切べし、又向廻り、道具疊に進み、居前を見斗座すべし（但し替茶椀を建水持出る節、右の手に持出、座したらば左り手に移し、建水の向に置付べし）次に柄杓を引、居前を直し、建水を進めて一禮喫烟を御隱意に可レ被レ成抔と云ふべし。次に客方は上座より亭主に對し、今日はさぞかし御勞可レ被レ遊私共は結構な御茶を戴まして誠に善樂をいたしました、御道具類も御取合よく思ひます、中にも御茶入、茶杓は大に賛成いたしました、御軸物も立派なる事にて紙中も奇麗、表具も古く、一文字風帶の切印金は金粉の光澤不レ變、時代ものは違升、中廻の竹屋町切上下の絹軸の牙も眞去り疵氣も更に無レ之、墨蹟類も近年頓と少なしと云様に、節々聽目〳〵を挨拶すべし。二客以下は是に相槌を打と心得べし。又品を替へて、釜炭斗、香合、水指と、品々を可二言盡一不明瞭の品は亭主へ可レ尋、雖去餘り口に任せ喋々敷云ひては世辭輕薄に聽へ、封間然として面白からず、失敬なり、眞實寔しやかに言がよし。亭主は又自慢に不レ成様に謙遜自讓して、名物の品と雖卑下して、左様にも可レ有レ之歟御評をも伺度、或は御鑒定を願舛と云べし。又末座は上客に客邊の欠點を補ひ、挨拶をなすべし。併

又一も結構、二も結構、三も結構と云ては亭主への阿諛に成と素人は思ふも左に非ず、善客善亭主と云古人の教もあれど、務めて是を言べし、是を默止して不レ言時は、席中寂寞として茶味無レ之、是を惡客惡亭主と云なれど、主客持合て、一會の茶を結了するを茶の湯の大體とす、是等の話を辨しながら薄茶を點て出すべし。

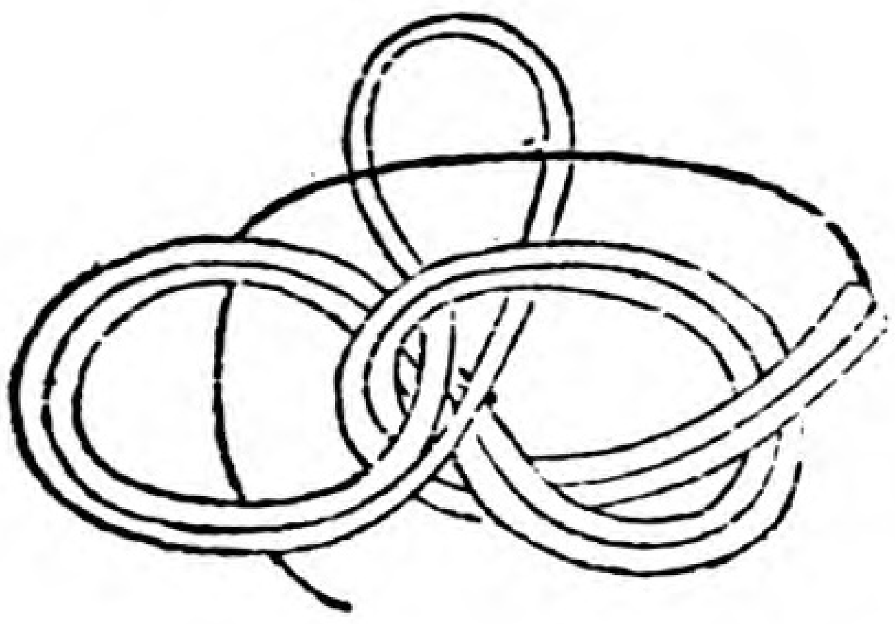
（以下次號）

撰 結物百種

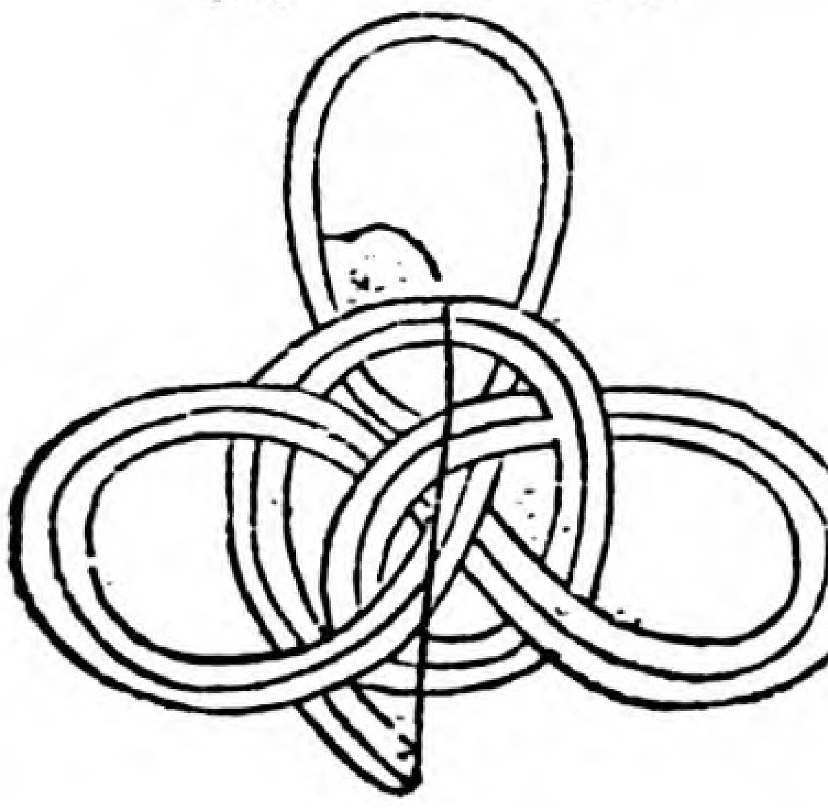
百草庵一無

眞のとんばう結27（伊勢流）旗竿の蟬口に付くる結なり。

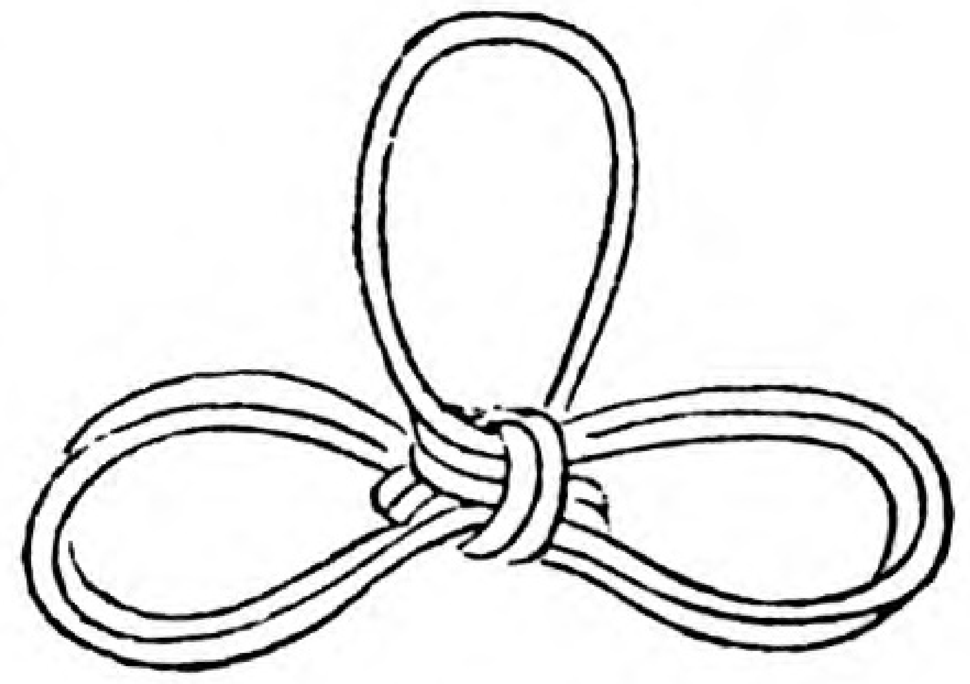
第一圖



第二圖

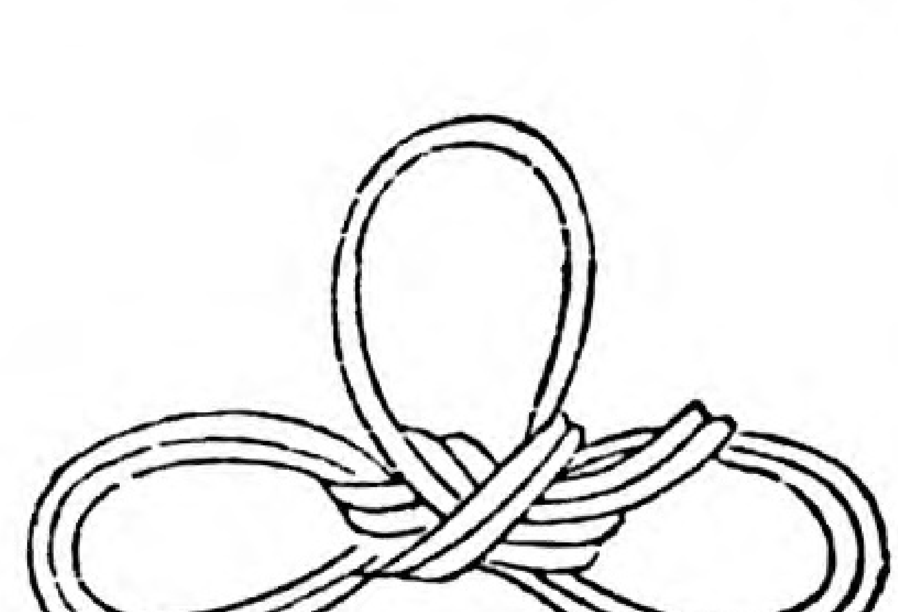


（表）第三圖



結び上り

（裏）



だいどころ

四季料理の取合

夏の部（續）

膾

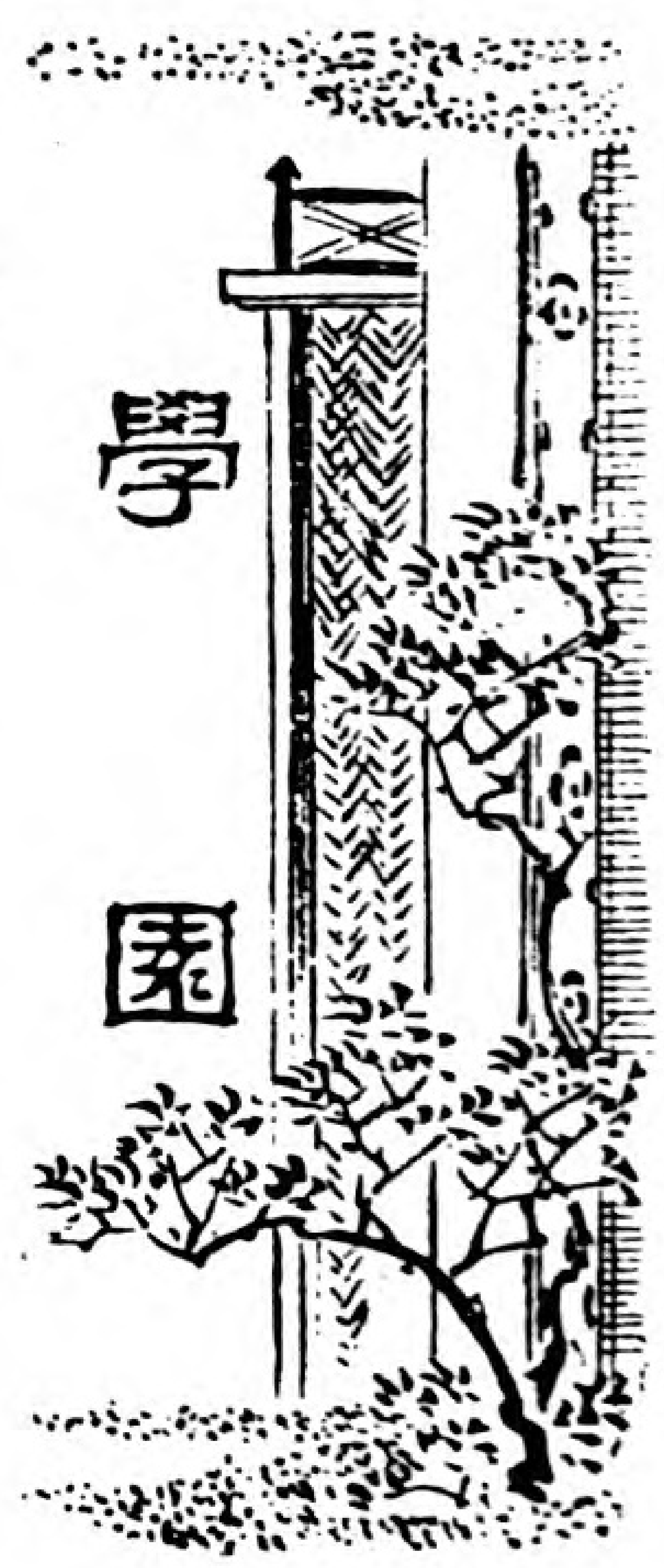
鰺脊ごし、胡瓜せん、蓼、志そ、酢○鯛細づくり、白瓜せん、三杯酢○ばらほそづくり、むしり海老、わさび酢○鱸のなげ作り、海松貝、蓼酢○さらし鯨、午房せん、山椒、酢○志め鰺、はな鮑、白髮うり、栗生姜

金かん〇洗鯉、唐草いか、二葉しそ、栗生姜、金かん、煎酒酢〇鯛重ねぎり、さい形、椎茸、はす芋せん〇鰹魚大身作り、胡瓜小口、蓼酢〇洗ひ鮒、獨活しらが、いり酒〇水貝に花生姜〇わかめ、茗荷たけ、じゆんさい、生姜酢〇鯖、胡瓜、たで酢〇鯛作り身、胡瓜、しそ、生姜酢〇海老、胡瓜、煎酒〇皮引鮎、大たんざく、たで酢〇鮎細作り、じゆんさい、合せ酢。

煮物

赤ゐび、すつぽん煮、山椒〇たけのこ輪切にさやゐん豆〇茶せん、茄子、新午房、あんかけ、ときからし〇冬瓜、はじきまめ、あんかけ、おろし生姜〇あげくわゐ、たけのこ、葉山椒〇新芋、十六さゝげ、あんかけ、おろし山葵〇蛸薄きり、茄子切てとも煮〇鶏肉に、むしり蒟蒻、すり柚子〇芝海老、胡瓜あんかけ、おろし生姜〇赤ゐびに、はじけ豆、あんかけ、ときからし。





秀歌集（四十）

鹽井正男

〇

思ひ立つ鳥は古巣もたのむらむ
馴れぬる花のあとの夕ぐれ

〇之は新古今集春の下に、寂蓮法師が千五百番歌合によみたる歌なり、〇思ひ立つ鳥は、今はとて思ひ立ちて歸へる鳥にて、この鳥は、鶯のことなり。うぐひすは山に住て、春來れど、里に出で、春すぐれど、また山へかへるものとす。されど、かく云ふなり、〇古巣。古き巣にて、即ち鶯の古き山の住家なり、〇馴れぬる花のあとの夕ぐれ。この頃なれ〱たる花の散りはてたるさびしき夕ぐれをといふこと

にて、われ等は何をたのみて思ひ慰さまむと云ふ意をあましたり。

○一首の意は、今はとて古巣へ思ひ立つ鶯は、花に別れても、なほ古巣へ歸へるといふ頼みもあらむが、われ等は、馴れにし花の散りはてたる此のさむしき夕ぐれを、何を頼みて思ひ慰さまむ、誠にうらさびしきやと云ふことなり。意匠も、詞づかひも器用にて、語勢に餘情を云はせたるところ面白し。

○

駒とめてなほ水かはむ山吹の
　花の露そふ井出の玉川

○之は皇太后宮大夫俊成が百首歌奉れる中の歌にて、同集同部にあり。○駒とめて。駒をとゞめてといふことなり。○なほ。俗にやはりといふ何時までもといふ意にて、やはり毎時までも駒に水かはむといふなり。○水かはむ。水をのませむといふことにて、駒に水をのませむといふなり。○花の露そふ。花の雫も加はるといふことなり。○井出の玉川。山城にありて、或は、井出の玉水ともよめり。

○一首の意は、山吹の花の雫をも加へたる井出の玉川に、やはりいつまでも、駒に水をのませて居て、その間も山吹の花を見むと云ふことにて、山吹の花の美はしきに、過ぎかねたるこゝろなり。源重之が、おなじ井出のわたりの歌に、

春の日はゆきもやられず蛙なく
　井出のわたりに駒をとゞめて

といふあり。これは、井出の玉川のほとりに蛙の聲のめでたさに、ゆき過ぎかねたるけしきなり。蛙と山吹と、物は異れど、おなじく、そのものにひかされて、行きすぎかねたるけしきは、同じ。されど、俊成卿がやはりいつまでも駒に水かはむといひて、花にうかれて、行き過ぎかねたるところをほのめかし云へる手振りは、重之が駒をとゞめて行きもやられずとうちつけたるよりは、一しほ風情こもり

ておぼゆるごとし。

○

くれてゆく春の湊は知らねども
　　霞に落つる宇治の柴舟

○之も同集同部にありて、五十首歌奉るとて寂蓮法師のよめるなり。○暮れてゆく。春のくれゆくことにて、また、夕ぐれのけしきをももたせたり。○春の湊。春のゆきとまる所を云ふ。古今の秋の歌に、「年毎に紅葉ながる丶立田川湊や秋のとまりなるらむ」とある歌の詞より出でたり。○霞に落つる。川瀬も見えず立ちこめたる霞の中に、舟の流れを下りゆくをいへり、○宇治の柴舟。宇治は宇治川にて柴舟は柴を積みたる舟なり。

○一首の意は、暮れてゆく春の行きとまる處は、何處なるかを知らねども、宇治川を見れば、川瀬も見えず立てこめたる夕ぐれの霞の中を、柴をつみたる舟が、下流の方へ下りゆくといふことにて、その餘韻に、あの舟の行く方が、春の湊にあらずやともれば、ゆるといふ意をひゞかせたり。古今の歌より、春の湊といふことを思ひつき、それに、霞を落つる柴舟を取り合せて、作りたる歌にて、意匠といひ、詞づかひといひ、器用にして、しかも、はなやかに風情ある、誠に寂蓮の得意の詞とすべし。

○

あすよりは志賀の花園まれにだに
　　誰れかは問はむ春の故郷

○之も同集同部に、攝政太政大臣が百首歌奉れる時の歌なり。○志賀の花園。志賀は、近江の志賀なり、稀れにだに。まれになりともといふことなり。○誰れかは問はむ。誰れか問はむ、誰れも問はざらむといふことなり。○春の故郷。春のすぎにしあとを云ひて、志賀の故郷をかねたり。同じ人の歌に、「よしの山花のふるさと跡たえて空しき枝に春風ぞふく」とある花のふる里に、花の散りたる跡とよし

の故郷とをかねたると、同樣の詞づかひなり。
○一首の意は、春の花見に、此の志賀の花園を、數多の人の問へるが、明日よりは、稀れになりとも、誰れか訪ひ來らむ、訪ひ來る者はなからむ、此の春の過ぎ去りたる跡の故郷などいふことにて、志賀の里にて、三月のはての日の心なるべし。志賀の花園を、春の故郷といひかへて、末の句にくりかへしたる詞つかひ、誠に面白く味ふべし。若し、これを萬葉あたりの手振りにせむ「あすよりは志賀の花園稀れにだに誰れかは問はむ志賀の花園」といふやうに、志賀の花園をくりかへすべきを、かく花の故郷といひかへて、くりかへしたるは、新古今時代、慥に我が歌の技術、否、我が歌のすゝみたるを見るべしと云ふも、過言にあらざるべし。情と云ひ、詞つかひと云ひ、調といひ、誠にやさしく美はしく、よく詩の美をあらはしたる歌と云ふべし。

○秀歌集の三十九に就て

加藤雄吉

鹽井ぬしがものされし秀歌集(一七四號)三十九の中なる知紀の歌に、

たらちねの袖にすがりて下りたちし
むかしこひしき早川の水

とあるは、知紀が其乳母を想起しての作なるべし、さだかには記臆せざれど、忍草には「市來郷にものしける時」とかいへる詞書ありしとおぼゆ、知紀は幼時日置郡市來郷なる江夏某といへる乳母に育てられけるよし曾て聞ける事あり、されど東上の途次市來郷を過ぎし折り、ゆくりなくも昔の事のしのばれて斯くは口號まれしならん。因に記す、市來郷は知紀の生地鹿兒島市を距ること約九里の處にして早川はやがて其傍の流なり、歌の釋の上よりいへど固より取り出でゝいふにも足らぬ事なれど、たゞ思ひよれるまゝをかくなん

源氏物語講義（二十一）

下田義天類講義
山川鵜一筆記

目も見え侍らぬに、かく畏き仰事を光にてなむとて見給ふ。程經ばすこしうち紛るゝこともやと、待ち過す月日にそへて、いと忍びがたきはわりなきわざになむ。いはけなき人もいかにと思ひやりつゝ、諸共にはぐゝまぬ覺束なさを、今は猶昔のかたみになずらへて物したまへなど、こまやかにかゝせ給へり。

○めも見え侍らぬに云々　母君北の方の言葉なり。命婦の傳へたる聖意をうけて申すなり。この頃は明暮ながめてばかり居ります故に、眼も泣き澁らして見えませぬ程なれど、かやうに數にもあらぬ身を、宮中にまでもと仰せ下さるゝありがたき御勅諚を頂きまするは、此の上もなき身の光であります。物も見えぬ程泣きはらしたる目なれども、この光榮をたより力草にして拜見し奉らむとなり。光にてなむ見侍らむなど、含めて省きたるなり。この一句、目も見えはべらぬにとありて、光にてとあるは、事の情つらぬきて、緣の言葉の放れざる妙は更なり。目の見えぬといひて泣きあかしつゝあることをしらしめ、光といひて身の光榮なるよしを知らしめたる筆つき例の敬伏の外なし。

○ほどへばすこしうちまぎるゝこともやと云々　以下御宸翰の文面なり。先きたゞれたる御息所の事を、月日を立ちて間の遠ざかつたならば、少し位は他のことにまぎれてうち忘るゝこともあらんかと、豫ては早く月日のたてかしと待ち暮して居たるに、然はなくて、却りて其の成行は反對に出てゞ、月日が立てば立つに副へて、猶更御息所が戀しうなつて、こらへやうとしてもこらへれらぬは吾ながらあまり無情なわけであるとなり。○わりなきわざになむの下には、ありけるといふ詞を含めて省きたるなり。

○いはけなき人もいかにと思ひやりつゝ　いはけな

き人は幼少なる人なり。即源氏君のことなり。いかにとは、いかに暮すらんとの意を含めたるなり。さやうな露ふかき所におはしましては、若君も如何に心細くておはしますらむと思ひやりて、心配のみしてをるとなり。思ひやりつゝは、思ひやりて思ひやりての意にて幾度も思ひやるよしなり、即前回にて說きたる第二義のつゝなり。

○諸共にはぐゝまぬ覺束なさを　この所の意義に兩說あり。舊註には、諸共にを、陛下と御息所と諸共にの意として說けり。本居翁は、これを、陛下と北の方と諸共にの意なりといはれたり。思ふに本居翁の說のごとくなるべし。陛下が靭負の命婦に御傳言して、北の方に參內を勸むる詞にも『暫時は夢かとのみたどられしを、やう〳〵思ひしづまるにしも、さむべき方なく堪へ難きは、いかにすべきわざにかとも、問ひ合すべき人だになきを、忍びては參り給ひなむや。若君のいと覺束なく、露けき中に過したまふも心苦しう思さるゝを、疾く參りたまへ』といふ、今亦御宸翰中にも『昔のかたみになずらへて物したまへ』とあるによりて察するも、聖慮には、北の方に若君を共なひて參內せよといふことが、この所の主なれど、參內させて、陛下の北の方と諸共にはぐぐまむとしたまふよしにきこゆれぞなり。○覺束なさをの下は、のみなげき渡れりなどゝ含めて句となすべき所なり。陛下御自身には、明暮源氏の君を思ひやらせたまひて、御手許近く見そなはしたまはず、北の方に任せおきて、諸共に御養育あそばされぬ心許なさをのみ嘆き渡らせたまふと云ふ意なり。○はぐゝまぬ　はぐゝむは羽銜むなり。鳥が其の雛を羽翼に入れて養ふよしなり。其より小兒を養育する義に用ゐたるなり。

○今はむかしのかたみになずらへて物したまへ　むかしのかたみとは、なき御息所をさしていへり。御息所は、故大納言の形見として、北の方一人の手し

て養育したる人なれど、むかしのかたみといへるなり。北の方には御息所の御幼少の時より、此の君を夫の形見として、掌中の玉と育てあげたれど、今は其もなき數に入りたれど、とてもかくてもはかない世の中には致方もなきゆゑ、今はやはり此の若宮を、むかしのかたみたりし御息所と見なして、宮中に共なひ來て養育せられよ。さすれど吾も諸共にはぐゝまむにとなり。○物したまへど、すべていにしへは何事にてもその所作をさして物すといへり。衣服を着することを衣を物すといひ、文を遣はすことを文を物すといふがごとく、その事の所作を現す代りに用ゐたり。こゝは參內せよといふ意に用ゐたるなり。猶御宸翰中には、○などこまやかに書かせ給へり　この外にも在りたりけむを、草紙にて程能く畧して、其の緊要のことのみをこゝに掲げたるやうに思はせたる筆法なり。

布美安波勢（一）

白松園主人寄

本誌學園欄、既に解釋あり、歌集あり、豈に文合もなくてやは。おのれ此頃、篋底をさぐりて、なき兄の、甞つて校訂しおける、松乃屋門六友の文合を得たり。即ち錄して、讀者の座右に呈せんとす。此のふみあはせに就きての顛末は、亡兄の緒言に見ゑたり、そのまゝ左に掲ぐ。

緒言

一、此書は、文政の比、松乃屋藤井高尙翁の門人、片岡徳、岡祝之、渡邊重豐、篠部清風、當麻尙文、藤原保世、の六友が、月毎の集會のなべ、題を出して互に物しあひたるを、後に取り集めて、左右の方を分ちつがひて、師の翁に判を請ひ得て、添削をさせ附けられたるを、そが儘に、片岡徳氏が編みて一冊となし、即て文合とは名けられつるなり。抑、中古の

時代には、歌合は更なり、物語合、艶書合など、何合、くれ合といふわざ、盛に行はれたりしが、皆これ、其身一人の一時のすさびにのみ止りき。今片岡氏が集められたる此文合は、師の評判は更なり、添削をさへそがまゝに載せられたる、昔の樣とは異にて、文合といふ上よりいへど品位下るも、國文眞盛に赴くめる、今の世の學者の身にとりては、こよなき文範にて、例の益なしわざとは、日を同じくして語るべくもあらずかし。且は師の翁の風采、六友の志操など、七十余年の昔をかいまみらるゝわざなりけり。さても世には、何文範くれ文範とて、いかめしき名稱をかぶらせたる、事々しき物のみなめる中に、此書の文合てふ名稱の異樣なる、もどかしがる人もあるなるべし。

一、片岡氏が物せられたるは、素より文範にせんの志にもあらざりけん。されど、原書は文字優美に過ぎて、句讀などもすべて附けたらず、且間々眞字を用ゐられたるにも、添假字などの、いかにぞや思はるる所少からず。とかくに原書の儘にては、初學の者にはわかぬ節多かり、されど今別に校へ合せて、かしこゝ、かつ〴〵補ひ加へて物しつ、されど猥にもとの假字を、眞字に改むるなどの事はせず、なるべくは舊を失はざるやう、勉めつるなり。

明治廿五年五月　新井健之助　識

正月

はじめて鶯の聲をきく

左持　篠部清風

そらのけしき、うらゝかなるに、前栽の紅梅の咲きいでたる、えもいはぬ花のかをりは、霞とともに、天つそらにもみちぬらん。吹きなみだしたまひそと、しなつ彦の御神にねぎまつりて、ながめをるに、谷の戸をいまやいつらん、鶯のゆくりなく飛びきたりて、一こゑ二聲おほどかになく、あなやといふうちに、はやいづ

ちにかいにけむ、影だにもみねぬは、あかずくちをしきことにこそ。

右　　當麻尙文

つねは朝いがちなるも、年たちかへるけふは、つとめておきいで丶、もろ〳〵の大神の御まへに、御酒もちひなどそなへ奉り、家のうちの人みなうちよりて、かはらけとりかはし、屠蘇白散のみつ丶、かたみによろこびいふほど、日影うら丶かにさし、軒ちかき梅の花の、かつ〳〵咲きたる枝つたひて、鶯のまだと丶のはぬ聲になきたるは、いとめづらし。これよりはじめて、花といふ花もうつくしう咲きいで、鳥といふとりもみさかりにさへづるらんと、春ふかく思ひやらる かし。あら面白の梅のにほひや、あらたのしの鶯の聲や。

評、左のふみ、をかし。右の文は、たくみにおもしろくて、そのかたはまさりて見ゆれど、末にいたりていひざまわろし。なぞらへて持とす。

白松園生いふ、本文の左傍に、＝＝＝の如き點を施したるは、文の疵を高尙翁の、示めされたるにて、右傍に示めせる文字に、改むべきよしなり。右方なる添削の假字は、元と平假字なれども、見易ければをのれ片假字に改めつ。



漫録

敎梯抄

この書は、德川幕府の麾下にして、大坂河口の疏鑿をはかり、そが土もて築きなしたる、天保山と共に、良吏のきこえ高き、新見伊賀守正路ぬしの、著されたるものにて、其のなれる故よしは、自らものしつる序に、つばらなれど、はぶきつ。今かく此をうつ

し出でぬるは、たちかへり來む春のはじめより、こを見む女わらべ達の、一日に一哥づゝ誦みうかべて、一はいにしへ人の心たかきしらべを知り、一は今の身の德ひきゝ行をたすくる、便ともなれかしとの老婆心より、いはゆる遼東の豕の、そしりをもわすれて、かくは寄せまつるになむ。傳寫のあやまりと、おぼしき處々も、かつ〳〵見ゆれど、片田舍にては、校へ訂すべき、原書の得がたけれど、今はたゞそのまゝに、さしおきつ。

序

遠江　松竹居主人

おのれはやうより、玉くしげ二世をかけて、三ところの君々に、なつさへつかへたてまつりて、身にあまりぬるおほんうつくしみのなみは、筑波山の、このもかのさのかけよりも、猶しげく、伊勢の海の、千尋の底よりも、いや深くして、四方の海を、硯の水にかたふくるとも、あまのかるも、かきつくしかたくなんありける。今年の冬、おもはさるに、仕をかへし奉りて、仙人の折袖にはふ、菊の名におふあたりに、わけのぼりて、ひたふるにとのゐもる身となりにたれど、くれ竹の、ことの葉しげきふしも、あらざれど、露の間に、千とせをふる心地して、百敷の、大宮人ならぬ身も、青柳の、いとまあるに任せて、しづかなる窓のあけくれ、硯にむかひて、文机のふみをひもとき、見ぬいにしへの人を、友として、三たひわが身をかへりみ、年寒き松の心にならひ、千代をぞ君と猶いのりつゝ、おろかなる心のかゞみみがゝまほしく、塵うち拂ひたるに、子とも來む春のもてあそびに、歌かるたかきてよ。とこひ侍しかど、あみのうけなはうけひきぬれど、世にふりにたるは、めづらしけなけれど、あらたなる心はへもかな。とつら〳〵つむきつらつらとかうかへし。代々の　勅撰をはじめ、わたくしにゑらみれけるふみ、はた家々の集のうちよりも、君の爲にあかき心をあちはし臣たる道を盡し。民の草葉の時をしり。妹背の中

にしちあるなさけを通はし。海山へだてたる友にも、心のまことをつくし。或は世をさとり。名を惜み、あるは、鳥獣のうへまでも、哀みたるたぐひの和歌をさぐりもとめ、ひとゝせの日數になぞらへて、三もゝ六十あまりとさだめ、一卷とし。その歌どもを。かるたにうつして、あたへ侍りぬ。此の歌どもを、朝夕の枕ことにして、心の水の清きをくみ、麻のなかの蓬の、正しき姿にならひなむ、世をわたる道の、をしへのかけはしともなるべし。とて敎梯抄と名づけ侍りけるになむ。かくいへるは、天保十とせまり四かへりのとし、霜月のはつか餘り、あつめぬ窓の雪の光にむかひて、源の正路しるす。

敎梯抄

春　三十五首

おほさゝぎのみかどのなにはづにて、みこときこゑける時、東宮を互にゆづりて、くらゐにつきたまはで、三年になりにけれど、王仁といふ人のいぶかりおもひて、よみてたてまつりける。

古今序

難波津にさくやこのはな冬ごもり、
いまは春べとさくやこのはな、

嘉元百首歌の中に立春　已心院攝政左大臣（師敎公）

嘉元百首

あめつゆを君がめぐみのはじめにて、
けふよろづ代の春をしるかな。

嘉元百首歌の中に霞　入道頓覺（公雄公）

同

御代にあふたみのかまどは春がすみ
けぶりを添へてにぎはひにけり。

嘉元百首歌めされしついでに

續千載集雜上

法皇御製（後宇多天皇）

いとゞ又たみやすかれといはふかな。

わが身世にたつ春のはじめは、

弘長百首歌の中に、春雪

後九條前内大臣（基家公）

弘長百首

をさまれるあきつ島根はおしなべて、
　みちある春のゆきのむらきえ。

朝鶯といへることをよませ給ひける

續後拾遺集春上

御製（後醍醐天皇）

あさ日かげくもりなき世にいでにけり。
　たにゝのこらぬうぐひすの聲、

嘉元百首歌めされける序に

新千載集雜上

後宇多院御製

ときしあれど谷よりいづるうぐひすに、
　世をたすくべき人をとはゞや。

文治六年女御入内御屏風、池邊春駒

夫木集春

後法性寺入道關白

はなの山こまさへはなつ御代なれど、
　われしも春にあふとしらずや。

題しらず

新古今集春

西行法師

とめ來かし。梅さかりなるわがやどを、
　うときも人はときにこそよれ。

春月のころ

新葉集雜上

前大納言守房

かすむ夜の月をみるにもくもらじと、
　おもふこゝろを猶みがきつゝ。

千五百番歌合に

新古今集雜上

有宗朝臣

はるさめのあまねき御代をたのむかな。
　しもにかれゆく草葉もらすな。

建長三年毎日一首の中

夫木集春

民部卿爲家

はるさめを花もさこそはたのむらめ。

はくゝみたつるかそいろはとて、

歸鴈を

新古今集春上　　攝政太政大臣

わするなよ。たのむの澤をたつかりも、
いな葉のかせの秋のゆふぐれ、

弘安百首歌奉りける時　　大藏卿隆博

續千載集春上

かへるさをよしやうらみじ。春のかり、
さぞふるさとの人もまつらむ。

歸鴈を　　中務卿宗良親王

拾遺風体抄雑

こしかたにかへるはかたき世の中に、
いかにならひて鴈のゆくらむ。

のそむこと侍りける頃雲雀をよめる

新葉集雑上　　源頼武朝臣

道しらむわれにをしへよゆふひばり、
やすくもあがる雲のうへかな。

花のうたの中に　　中院入道一品

新葉集雑上

さきそむる花に志らせじ。世のなかの、
ひとのこゝろのうつりやすきを、

題しらず　　紫式部

世のなかをなになげかまし。山さくら
はな見るほどのこゝろなりせば、

白河殿七百首歌の中に　　池邊花

白河殿七百首　　前左府（實雄公）

ふくかぜもをさまる御代はすむ池の、
花のかゞみはいつもくもらじ。

花の御歌の中に

新葉集春下

後村上院御製

さきぬべきかたえにうつるこゝろ哉。
かつ見る花もめかれせぬ間に、

（以下次號）

編者いふ。僧均月、何處の人といふことを知らず。年ごろ、京都に住みて、歌を、清水谷大納言實業卿に學び、また、之を、平井寛敬に傳へきといふことは、さきに、本誌第百四十九號漫錄欄に載せたる詠歌大意の奧書と、この紀行の文とによりて知られたり。この紀行は、享保二年の作なれど、今よりは、凡百八十年の昔のものなり。

▲は補、●は誤、

みちのく紀行（一）

故僧　均　月

麿は世を出し昔、都のうちに十とせあまりの春秋をへて、月に花に心をやり、いそのかみふるきあとをたづね、煙霞をあはれび、泉石にふける事、やまひに入りて、風光にうそぶきしが、くに〴〵に、名だゝる海、山のたゝずまひ、ゆかしく侍りて、あるは、さゝなみやにほてる海をめぐり、不二のすそ野の草をかたしき、筑波ねのこのもかのもをわけ、むさし野の尾花がもとに月をまち、あるは、よしのゝ花の陰にちるをれしみ、住よし、和歌の浦の松がねにやどり、すま、あかしの波にうきねして、心つくしの磯のうへまで、さまよひ侍りしは、おろかなるこゝろのすぢにひかるゝきづななるべし。抑、わがみかどの六十よ國のうちに、鹽がまといふ所ににたるところなかりけりと、在五中將の物がたりにも、かゝれ侍れど、みづかきの久しく松しまやをしまの波、心にかけてみまほしく、此の十とせばかりあなた、都を出で、むさしの國にくだりしより、みちのくのかたに、行脚せんのあらまし侍りしかども、年々さはる事ありて、入江の芦のはいとげさりしに、ことし、むそしにおよび侍れど、しがまのあながちに、おもひ立つべき心のおくを、へだてなき友がきにかたちへ侍りしかど、我も幸ひそれこれいひあはせて、黒

髪山をわけ、松島におもむき侍れど、いざとそゝのかされ侍るもうれしくて、さらで、驥の尾につき侍らむとて、とみに、出立つ事になりぬ。是をきゝて、ある人のもとより、ともなはぬ事など、いひおこせたるおくに「わがおもひこがるゝとしらでみちのくに心をつれよ鹽がまの浦」と有し返しに、

友なひてゆく旅ならでしほがまの
浦にこがるゝおもひあらじを

又、ある人のもとより、いつのころかへるべきおちましにやといひて「波かせもしづかなる世に旅立ちて君やこゆらむ末の松山」といひおこせけれど、返し、

待人のなみこえぬまにかへりこん
ほどはさつきの末のまつ山

かくて、卯月しものひとひ、友とする人にさそはれて、夜ふかき有明の月とともに、むさしのゝ草の庵を立出でぬ。折ふし、郭公の鳴きわたるも、我をおくるにやとあはれにおぼえて、

わかるともおのがさつきにかへりこん
かへりてをまて山ほとゝぎす

やがて、明けはつるころ、うへのゝ下を行くとて、

いつこへん旅の行衛の忍ぶ山
忍びの岡をけふわくるより

下谷の里つゞき三の輪といふわたりにて、さし出づる日影、さやかなるも、旅立つそらにうれしくおぼえて、

雨にきるみのわの里の名にもにず
けふ行く空の照日くまなき

千住より、草賀といふ里を過ぎて、河にそひゆく。名を尋ねければ、あや瀬川といふ。まこも、うきもなど生ひしげりて見えければ、

ゆく波のあやめも見えぬあや瀬川
岸もひとつにしげるみくさに

行末の里を、人にとひければ、賀もといへり。社もあるにやとみれど、神垣も見えず。いぶかし。

神がきはそことも夏の草しげみ
わけゆく加茂の里の名のみに

けふ、二本松の領主、かすかべといふ所を、とまりにて、さはがしきよしなれど、日高く侍れども、こしかへといふ所にとまりぬ。

そことなくけふこしかへの里とひて
草の枕や結びそむべき

廿二日、曉方、友とする人、いぎたなしとて、おどろかしけれど、ものうくればねて、ひとりだちける。

老らくはまづうらぶれてたび衣
あかつき露のおきうかりけり

さりとて、おくるべきならねど、ともなひ出で丶、幸手といふ里をさして行く。道すがら、あやしきかきねに、卯花おほく咲きたりけれど、

月雪のなさけもしらで住むしづの
かきねにあやなさける卯の花

里つゞき、こゝかしこ、あふちの花、咲きたる木陰を、過ぎがてに見て、

夏かけて見し藤なみのゆかりかも
うすむらさきにあふちさく陰

つゝみづたひに、くり橋といふ所にさしかゝるほど、帆かけたるふねのはしるもめづらし。

みるがうちに遠ざかり行く追風に
まほひく舟やとねの川なみ

やがて、利根にいたる。いと大きなる川づらなり。坂東第一のながれなりとかや。むさしと、しもつふさとのさかひなりといへど、すみだ川のみなかみにやと、(編者云、利根の上流と、隅田の上流とは、異なり、こは、思ひまがはれしなるべし)かのものがたりの事、おもひ出でたれど、遠くきにけりと、わぶべきほどならず。やがて、船さしよせて、わたりぬ。

ふる郷はまだ遠からぬ河なみの
しらぬさかひにへだてむもうし

此の川の汀に、籠に入れたる雁、四五みえたるを、わたし守にとひければ、おとりといふものにて侍る。秋

の雁のわたるころ、空ゆく友をさそひきて、わなに引きいるゝなりと、あるひは、五里、十里、遠く行くつらにまじりて、終には、引きつれて落つるとなん。又は、鳴き鳥といふは、空行く厂をよび下して、わなに入るゝなり。鳴鳥は、そのわたひことにむつかしといへり。されど、都鳥には、ことたかひて興なし。それ、厂は、禮鳥なりとて、もろこし人は、よみし侍るを、いかに、かく、不義には、ならはせるにかと、あさましく、いとにくし。佞者讒囮とかやいへるふることも侍るにや。

行くつらをみだるとはなき厂よなど
うきさかしらに友やまとはす

舟よりわかりて、中田といふ里を過ぎて、古河の里に行く。萬葉に「枕香のこがのわたりのからかちの音たかしもなねなく子ゆへに」とよみ、西行の歌に「霧ふかきこがのわたりのわたし守岸のふなつきおもひさだめよ」とよまれたれど、此の中田といふ處を、昔は、古河といひしとおぼゆ。今の古河の里は、中田より、五十町あまりあるべし。河わたりなどは、見えぬ處なり。けふは、古河にとまる。やどりたるをみれど、久我大納言殿。中山中納言どのなど寄宿し給ひしと見えて、札などありし。日光山へ御使のついでなるべし。おなじやどりに枕をかりたるも、いとかしこくこそ思ふたまへし。夜に入りて、雨ふりいでぬ。

かしこしなその敷捨し枕香の
こがのわたりのやとのかりねも

廿三日、雨晴れぬ。朝立ちて、松の下道を、はる〲と行く程、ほとゝぎすを聞きて、

たがさとに雨やどりして朝立や
おなじ行てになくほとゝぎす

古河より、三里程行きて、眞間田といふ處より、下野國となん、げに、人の言葉も、舌だみて、むくつけし。松原といふ處を行くに、時鳥、數聲、鳴きけれど、

國かはり言葉だみてもきけど猶

おなし聲なる山ほとゝぎす

小山の里を過ぎて、東のかたに、筑波山、間近くみゑたり。

みつゝ行く雲もかくさぬ筑波山
葉山しげ山おなじみどりに

やがて、石橋といふ所を過ぐるに、里人あまた、麥などかりほして、いとまなく見ゑけれど、

たが身にもことわざしげき世の中を
わたるやかたき石橋の里

すゞめの宮といふ所を行く。右のかたに、雀宮とかける社有り。手むけして、過ぎぬ。

夕日影すゞめの宮の名もしるく
ねくらもとむる里のたかむら

暮れかゝるころ、うつの宮につきぬ。さし入に、歌の橋といふ所有り。何のゆへ有りてかく名づけぬるやと、

とはゞやなたが言の葉にかけそめて
歌の橋てふ名をのこしけん

廿四日、宿をいでゝ、日光山にかゝる。ゆへに、宇津の宮にまうでず。歸路に拜し侍るべし。道すがら、馬ねぶりして、たびたび、おどろきぬ。

馬ねぶりうつゝともなし宇津の宮
見ぬ夢にのみおどろかれつゝ

道の邊に、こふかく、物ふりたり杉むらのうちに、社あるを、人に尋ねけれど、千門明神と申しければ、たむけし奉りて。

神のますしるしこふかき杉の門
千かどの宮井いくよへぬらん

徳二郎といふ里を過ぎて、右のかたに、おもしろき山なみ見ゑければ、馬士に尋ぬれど、音瀧山といひける。されど、瀧なども見ゑざれど、

いつよりか絶ゑて久しきしら糸の
おと瀧山の名のみひゞきて

飯森山などいふをみつゝ過ぎて、大澤といふ里にて、

ひるのやすみすとて、
　折からや旅にしほれし椎のはに
　　　飯もり山の名もあはれなり
今市といふ里々を過て、日光山のふもと、鉢石といふ所に、やどりもとめて、とまりぬ。　（以下次號）

浮世いかだ舟

作者不詳

人にさま〴〵の品ある事

今はむかし、浮世坊御まへにしてこう申せしをり、淨土宗の和尚きたられ、いろ〳〵佛法の物語有ける中に、そもそも彌陀の本願には十方衆生とちかはせられて、此十方衆生といふことぞのうちには、人間天上六道四生、すべていきとしいけるもの、ひとつももれたる事なし。念佛のくりきにてみなたすかるなりと申されたり。さてその衆生のしな〴〵はいかほどかり有けるとゝはせ給ふ、和尚こたへて申さるゝは、大にわけていふ時は、鳥けだもの龍蛇魚貝虫の七種に、人間天人をくはへて九種の衆生あり。しやうもん、えんがく、ぼさつの三乘は、人間天人にれさめ侍べりと申さるゝ。さて、魚鳥けだもの虫のたぐひは何ほど侍べるととはせ給ふ。和尚のいはく、十二遊經にとかれたるは、魚のたぐひが六千四百種、鳥のたぐひか四千五百種。けだもののたぐひが二千四百種。虫のたぐひが二千五百種有とみえ侍べると申さるゝ。さて人のたぐひはいか程有ととはせ給ふ。和尚申さるゝは、須彌の四州に四色ありと申さるゝ。それはしらず、まづ天ぢく、震旦、わがてうに其品いか程有ととはせ給ふに、和尚きとつまりて赤面し、それはしり侍べらずと申さるゝ。浮世坊さし出で申やうは、人のしなは數かぎりも侍べらす。そのかたちは大かた同じやうなれ共、まづかほのにたるはさらに一人もなし。そのうへに、鈍智貧福、下戸上戸、見にくきうつくしき、せのたかきひくき、いろ〳〵のかはりこれある事數もしらず。外のかたちよりは、内に

つゝみたる心といふものひとしき事さらになし。されど、子産がいはく、人の心のをなじからざる事その面のごとし。われあにあへて子の面わが面のごとくなりとおもはんやといへり。まことに人にまじはりしたむといへ共、我とひとしき人しなければ、わが心にかなふ事まれなり。人も又心にかなふ事すくなかるべし。面のかはれるごとくに人の心もひとしからず。その中に、よき道に入ておこなふ人には、したしみても〱その行跡をしたふべく。そのいさめをもうくべし。しかるを、忠言耳にさかひ、良薬口ににがしとかや。はんくわいがいひけるごとく、よきいさめをつよくする人はかならず人の心にかなひがたし。あしき道にはおばれやすく同じやすし。それにとりて、いにしへの聖人には、あるひはかうべは人にして身は蛇のごとくなるも有。あるひは身は人にしてかしらは牛のごとくなるも有。又口のかたち鳥のくちばしのごとく、又四つの目有し人も侍べりしか共、みな聖人にしてまつりごとただしく、そのおこなひ天理にかなひけるを、いまの世の人は、かたちは人にして、只その面のひとしからぬばかりなれ共、異相にはなし。それに、心だてはみな鳥けだもの丶ごとくなり。孟東野か詩に、古の人は、かたちけだものに似てみな聖徳あり。今の人は、面は人に似てけだもの丶心也。いづくんぞはかるべきといへり。一國一郡をもしる人は、民をもあはれみ百姓をもめぐみ、すぐなるまつりごとをおこなふべきことなるに、不作不熟をもいはず、年貢をこきとり妻子を沽却すれどもあはれ共思はず、くわやくをかけてとりたふし、民家めつきやくすれ共いたはりげもなし。又商買をするものは、日夜に天をまもり、日てり洪水大風をかんがへ、目に見ぬうちより米穀のねだんを高下して、諸人の喉をしめ、むねをひやさしむ。是のみならず、萬事につけてねだんをあげつさけつ、ろくろのごとくに上下せしむ。是みな大よくに心をまどはし、情もしらずあはれみもしらず、ころぶ處にはおきざまに

土なりともつかむやうに、りかんのまはしをいたすゆゑに、わずか成もとでにてあきなひをするものは利分すくなし、追付かね、しよくをしてもつゞかねど、たちまちに身上たふれて、子をうり妻にわかれ乞食になるものおほし。さるまゝに、延喜天歴のいにしへをしたひ、米商人をうらむ事いふばかりなし。是を思ふに、かたちこそ人なれ共、その欲心の心ざしは、虎狼のごとくなり。されどこそ、人はどその品おほきものはなからめといへど、おはなしの衆閑齊申やう、それは商人のとがにはあらず、其時分に生れあはせた世の人の福分うすきゆゑなり。只今われらはさほど世をすぎかねぬは、福分をつよく生れつきたるにて、むかしの人は今をうらやむなるべしといふ。和尚も聞玉ひて、それそれとの玉ふ、うき世坊かくぞよみける、

世の中に道こそなけれ思ひいる
山のおくまで米の高さよ

梅妃傳（其二）

赤松景福譯

梅妃高力士に黄金を贈り、詩文に巧なる人に誂へて、再び寵を望む心事を、文にかゝせて奉らむとせしに、折しも力士は貴妃に附て、且楊氏の盛なる勢に畏れて、竟にその周旋をせざりき。こゝに梅妃はせむすべなくて、自ら樓東賦といふを作る。その畧にいはく、

玉鑑塵生、鳳奩香殄、懶蟬鬢之巧梳、閑縷衣之輕練、苦寂寞於蕙宮、但凝思乎蘭殿、信標落之梅花、隔長門而不見、況乃花心颺恨、柳眼弄愁、暖風習々、春鳥啾々、樓上黃昏兮聽鳳吹而回首、碧雲日暮兮對素月而凝眸、温泉不到、憶拾翠之舊遊、長門深閉、嗟青鸞之信修、憶太液清波、水光蕩浮、笙歌賞燕、陪從宸旒、奏舞鸞之妙曲、乘畫鷁之仙舟、君情繾綣、深敘綢繆、誓山海而常在、似日月而無休、奈何嫉色庸々、妒氣冲々、奪我之愛幸、斥我乎幽宮、思

舊歡之莫得、想夢著乎朦朧、度花朝與月夕、羞懶乎春風、欲相如之奏賦、奈世才之不工、屬愁吟之未盡、已響動乎疎鍾、空長嘆而掩袂、躊躇步于樓東、

○附言　委くは原文の上なれど、こゝに其大要を説む、玉鏡も塵にくもり、鳳奩も香うせて、秋の月を見るにも、春の鳥を聞にも、皆憂を催す種子となりて樂しからず、嚮に君寵を得たりし時、遊び樂みしことを、今一度もがなど、戀しう懷しう思ふ心情を叙て、その文辭優におもしろし、本性の柔かなるによりて、怒り罵れる口氣を顯さず、彼揚氏が悍氣質に對へて思ふに、此方あはれになむ。

楊貴妃これを聞て、皇帝に訴て曰く、梅妃は賤き身を以て、怨を申すこと、いと畏し無禮、死を賜へかしと勸めしかど、皇帝默し居たまへり、偶嶺表より使の歸り來る者ありけれど、梅妃何處よりの使ぞ、若我が事につきて來れりやと問へど、或人答へて、諸國より楊貴妃に奉る菓を持來る使なりと云ふ、梅妃これを聞て、いと悲しみ涙を流しけり、皇帝花蕚樓に坐し時、外國より使來りぬ、勅して珍珠一斛を封じて、人知れず梅妃に賜ふに、梅妃そを受ずして、詩を使に附て、これを御前に進よといへり、その詩、

柳葉雙眉久不描、殘妝和露汚紅綃、
長門自是無梳洗、何必珍珠慰寂寥、

○附言　右詩の畧解をせむ、前二句、柳葉の如き眉も久しう畫がゝずして、衰殘たる妝は涙に衣などのぬるゝを云ふ、後二句、かやうに幽居（長門とは漢の陳皇后が寵を失ひて、長門宮に在りし事に擬へて云ふ）て、素より身を飾ることもあらねど、今更に珍珠を賜るも、わびしさを慰むる料とする要なしとなり。

皇帝此詩を御覽じ、憐みたまひて、樂人をして新聲にてこを歌しめて、その曲の名を一斛珠といふこと、此にはじまれりその後安祿山の亂に、皇帝は西に幸し、

楊妃は死けり、その亂鎮りて皇帝京に歸られて、梅妃の在所を尋ねたまひしかど、得ることなし、いと悲しみ給ひて、梅妃は兵火の後、餘所にさまよひて在らむと思召されて詔せらるゝやう、若求め得者あらむ、官三秩と錢百萬とを賜ふべしとて、廣く探り遠く索めしむれど得ず、又方士に命せて、方術を以て求めしむるにも得ず、ある官者梅妃の畫像を進獻りけるに、その像いとよく似たれども、存者の氣力なしと申す、その上に題ける詩あり、

憶昔嬌妃在二紫宸一、鉛華不レ御得二天眞一、
霜綃雖レ似二當時態一、爭二奈嬌波不一レ顧レ人、

○附言　詩の畧解、前二句、憶む昔梅妃宮中にありて、其時鉛華を傅けざれども、天眞美麗かりきとなり、後二句さて今霜綃に畫ける像はよく、當時の態には似たれども、その嬌波の人を顧眄する神氣の見えぬは、せむ方なき事よとなり、前二句は舊を懷ひ、後二句は今を哀むなり、

皇帝この詩を御覽じて、淚を流したまひて、勅してその畫像を摸して、石に刋らせたまひけり、其後皇帝夏晝寢せられけるに、髣髴に梅妃が竹の間にありて泣居るを見給ふ、袂を以て面を蔽へる態、花の露に霑しをれ、霧に立籠られたるが如し、妃のまうすやう、昔陛下亂に遇ひたまひし時、妾亂兵の手に殺れて、池の東梅の木下に埋られたりと申せど、皇帝汗を流して、駭き寤ませり。即ち太液池を掘せたまひけれど見えず、皇帝益うれへ坐る折、ふと悟りたまひけるは、溫泉湯池の側に、梅十餘株あれど、此處ならむとて、親ら出まして掘せたまひしに、果て梅の木下に、妃の屍を得つ、錦の裀に裹みて、酒槽に入て、土を附ること三尺ばかりなりき、皇帝これを視ていたく慟みたまへど、左右得あふぎ見ず、その屍の傷を撿せしに、脇の下に刀の瘢あり、皇帝自誄の文を作り、妃の禮を用ゐて、改め葬らせ賜ひきとなむいへる、

○附言　此次に梅妃に關せる論賛あれど、今は省き

し、載す。とにかくに、當時兵亂の如きは、玄宗が政を失ひしによれるにて、唯この一女子の罪には非ざれは、寛懐を以て佳人を見るべきなり、こゝに景福が先人の詩を識す、

讀二梅妃傳一　　村尾篁山

腸斷池邊梅幾株。君王和レ涙認二香膚一。
縱敎二聲樂猶依一レ舊。忍レ聽當年一斛珠。

同　　同

梅花未レ老一亭香。又有三牡丹呈二艶粧一。
若使三廟謨如二大舜一。江楊也得レ比二英皇一。

大沼枕山評云、明皇令三張九齡長在二相位一、則江楊並在二深宮一、亦可三以比二英皇一矣、

又　　赤松景福

いかにせむ相見し人は世にあらて
　昔ににほふ池のうめが枝

（完）

うらめしの雪（二）

白松園主人

あはれ、あたらしとも、悲しとも、いはんすべ、せんすべしらに、なげかるゝは、行水のかへることなき、君なりけり。おのれ君とは、從弟どちの中なるが上に、いといとけなき時より、同じ里の、しかもいと近きわたりに、住めりしかど、朝夕になれむつびて、野にも山にも、共に行かぬといふことなく、木の實を拾ひ、茅子をぬくにも、相携へぬといふことなし。かりそめの事にも、かたみに呼びも、迎へもせられて、はかなき遊びにも、必ず莚を共にして、なづさひつゝ稍やひとゝなりて、君は村の小學に入りぬ。おのれは、父が家塾にありて、なき兄等を始め、年たけたる、多くの人等と共に、漢學を旨とせしが、十一のとしに、始めて小學に入りぬ。そが爲めに、君よりは一級おくれてけり。君が家庭は、極めて朝とく起くる定めなりけれど、いとゝく起き出で、早くもおのれの屋の、椽先きに

待ちをりて、さて共に、登校するを常としけり。近きに試驗ありとて、復習などのをりは、机を並べて書よみなど、之れやまことの、竹馬の友なりけるが、其の情は兄弟にも、異ならずなんありける。かくて君は、小學にありしときより、年毎の試驗には、いつも首席を、占めぬといふことなく、賞與に與らぬ年もなし。すでに小學をも卒へてけれど、君は山口なる塾に入りぬ。おのれはまだ小學にありける、十三といふとしに、父におくれて、巣立ちもやらぬ雛鳥の、親に離れし心地しつ、ひとりの兄はありながら、その時は、さる陸軍の學校にありて、はるけき旅のそらなれど、父はうせ給ひぬれど、歸ることもゑならじ。一年ふたとせを經て、漸う軍役を辭して、歸りきぬ。とかくするうち、おのれは十七にもなりしかど、少しのたよりをしるべに、母と兄とに分れて、東にのぼりぬ。その時君はなにくれと、準備などあひ助けて、さておのれも、折をまちて、上京すべけれど、その時は相携へてなど、契りつゝ分れけるが、五月六月經しころ、君は思ひたちて、上京せんとしけるに、斗らずも、障れる事いできて、半途にしてかへりぬ。君が怨やらん方なし。その後止むを得ず、師範校に入學せるよし、君の知らせは來りぬ。そのとしの夏にもなりて、菖蒲咲くころ、我兄もふたゝび上京しぬ。紅葉も散りはて、雪のふり出でぬる比、兄はいたづきそめぬ、やう／＼重りて、次の年の、ふみづき魂まつりのころに、身まかりぬ。おのれは泣く／＼骨を負ひて、故郷にかへりぬ。君いたくこちなげきて、諸共に葬のわざたすけて、營みぬ。それよりふたとせを經て、君もおなじく、黄泉の人となりけるなり。おのれ常に他郷にのみさすらひて、家を顧みるに、遑もなきものから、君のありければ、よろづにつけて、おのれが母を、まめやかにいたはりて、月毎に具さに知らせたりけれど、おのれの心づかひも、いと少かりき。君なくなりてよりは、くはしく知らせこす者もなく、郷里のさまは、いかなるらむ、更に知らむ

よしもなし。

君がさがいとをかしく、はたやさしかりしは、さるものなりけり、ひごろ深く、おのれが兄の人となりをめでゝ、さながら其のさまをなん、ならひける。我兄いたく音樂をたしみて、月明き夜などには、横笛をなん、いとをかしげに、吹きすましけるを、君いたくめでゝ、自ら笛を作りて、頻りにふき習ひけるが、遂に上手になりにけり。我兄詩吟唱歌も、特の外に好みて、常にずんじ歌ひけるが、君また之れに習ひて、後にはいたうふかゝりき。風琴も亦習ひたるにて、自在にひきなしけり。假字眞字をも、いとをかしう書きけり。假字は我兄のをまねて、見まがふばかりなり、兄は千蔭の流なりけり。君まだをさなきとき、我父のいたく瓢をめでゝ、朝夕膝にうちのせて、之れを撫でつゝ、書を暗誦しけるを見て、いづくよりか、小くをかしげなるひさごを求め出でゝ、擦りつゝ、いたく光澤出できぬなど、誇らしげにいひけるなん、いとをかしかりし。我兄狩獵を好みて、山野をあさりけるを、君常に從ひありきて、鐵砲はこよなう、上手になりにけり。我兄みやび心ふかくて、心うみけるをりは、釣竿をかたげて、谷川に出で行きて、魚釣りけるが、此の道ばかりは、無下に拙くて、大方一尾も獲るは稀にて、空籠には、谷間の女郎花などひき入れて、庭に移し植ゆるなりけり。さるに君は、釣はいたく得意にて、鮠にても鮎にても、百尾を釣りくるは、たやすげなりき。

君のさが、洒々落々たりしかども、人と忤ひ爭ふことを好まず。我兄心甚だ剛くして、人に屈する事を屑とせず、一たび怒れども、いかなる權貴長者の前をも、ものゝかずともせざりき。これなん違へる處なりし。君の師範校にあるや、初めより首席を欠ぎしことなく、友に厚く、行ひ極めて正しかりければ、之れを悼惜せざるものなく、全校擧つて柩を送りぬ。

君おのれに、ふみを送るときは、何くれと精しくて、さて終りには、新しき唱歌の譜など、かき記すを常とせ

り、君我兄と、野邊に出でしときは、いつも墓地に行きて、こゝよし、かしこよしなど、墓地の位置を擇みたりしが、ふたりともに、早う失せにしかど、之れさへ、思ひ合はされて悲し。君のとし二十一、辭世あり、うせぬる前日書けるにて、筆のあとしどろに、ふるへたるいと悲し。

いかにせん賴むくすしも今はとて
　なさけもなくもわれをすてにき

されどなほ神し守りてますなれど
　こゝろのこまのなど動くべき

あはれ君がみたまよ、呼べども答へず、光陰荏苒して、今は昔の、君がうせにし月も　三たびをくりて、更に四たびとなりぬ。世も人もかはりゆけども、雪なん昔のまゝに、白妙にふりつもるを、見るにつけては、君が事のみ忍ばれて、おはかたをかしとながめし雪も、今はけうとくぞおぼゆる。さはあれ、雪はやがて消えぬべし、我そのおもひの、消ゆる日なきをいかゞはせん。

瞑途の勘定

金津常十郎

客曰、今、世上に、時々ありふれたる事に付きて、いろ／＼おもしろく狂文をつくり、われも他も、寫し取りて、もてはやすうちにも、はからず政の噂に似たる言もまゝありて、不敬の事にも聞ゆるあり。是らは、不出來の事といふべし。この頃、儉約の趣を、極樂と地獄との事に、狂文をつゝりたるあり。是は、手の外なる事ゆゑ、いづ方へも、さはる所なくて、おもしろし。其の文、左のごとし。

釋尊より被仰渡候御觸之覺

一三千世界近年以之外儉約に付、出家沙門布施もの至て輕く相成候故地ごく極らく共殊の外に困窮しごくにいたり何とぞ御すくひ被爲遊度思召に候へども中中佛知御方便にも時節から故相かなひ不申必至と指つまり候向後儉約を專一とし取りつゞき可申事

一菩薩の位にいたり候ては善人死來候せつ只今まで

三尊來迎有之候へども自今は來迎におよばず候且又異香くんじ花ふり候義は可爲無用候五種香包又は線香類にて相すまし可申事

一死人持來り候六道の錢只今まで鬼共配分いたし候へども以後は集め置月切に勘定を遂候て地ごく極らく破損の修覆入用に可致事

一弘誓の舟毎年修覆過分に相罹り候間以後は亡者どものこらず陸路通し申可事

一二十五の菩薩達も以來音樂指止可申候且又地藏菩薩毎日さいの河原へ被罷出候へども毎度衣類損じ申候間一ヶ月に兩三度宛被罷出子供支配可被致事

一十王中大閻魔王城へ出席之節束帶相やめ可申候月次釋尊御目見の時分は以來布上下着用可致事

一只今まで善人は金の札惡人は鐵の札に玄るし候へども以來は善人は奉書紙惡人はすきかへし紙を用ひ可申事

一業の秤度々修理いたし候畢竟毎度用ひ方はげしく候故損じ候間向後は罪人のふんどしにて目をくゝり棒を通し候て鬼どもかづき上げ、貫目を玄らべ可申候若々罪人よりまひなひを取りかるされもさのひいき箇間敷義いたし候はゞ急度吟味をいたし咎可申付事

一罪人吟味の節只今まで見目嗅鼻兩人罷出候共以來は一人宛衆帶いたしかはる〴〵出役可致事

一しやうはりの鏡毎度研直し候ゆゑ研賃過分に罹り申候間以後は十惡五逆の罪人までに見せ可申事

一鬼ども是まで虎の皮のふんどしいたさせ候へども今日より牛馬の皮を用ひ可申候其上隨分なるかぎりいたし候て大損じいたし格別見ぐるしく候はゞ調べ替可申事

一修羅の大皷度々張かへ候故手間料過分に相増候間以後はなるたけしずかにうたせ損じ不申樣相心得可申事

一無間地獄の釜の下かならず大火を焚申間敷少々ぬる

き事はくるしからず候若又鬼ども炭薪ぬすみ取候はゞ急度吟味いたし鉄棒を取上六道の辻を阿方拂ひに可申付事

右之條々百三十六地ごくのこらず被相觸隨分儉約を第一と相守被可申候且諸冥官中とも不相洩樣可被申談候萬一違背の輩於有之は急度可爲曲事候以上

儉約元年　　極樂役人

六道閻魔衆中

別紙之覺

近年施餓鬼米減少いたし候に付猶更餓鬼どもやせおとろへ候間御助米を以て御すくひ被遊度諸菩薩中段段御示談有之候へども時節がら故少も御調達の方便も無之候に付當分之所獄卒共の喰物の內を以て助合可申樣被仰渡候以上

儉約元年　　極樂御勘定所

地獄勝手方役人中

主曰、右の一段はよく出來たり。公がいひ給ふごとく、すこしも指障の事なくて、おもしろし。是に付きて、一徳和尚とかやの作れる極樂道中惣入用の覺書あり。似よりの話ゆゑ、語り申すなり。其の文、左の如し。

西方極樂道中雜用惣勘定之覺

極樂東門まで、拾萬億土を、一刻度貳拾五里宛のつもりにして、合せて、貳百五拾萬億里なり。但日本道法三拾六町壹里之割、右道中の間に、山河坂海があるなり。往來人の內、老若男女有之に付、平均一日壹人五里歩行圖にして、泊日數貳百萬億日なり。是を、壹箇年三百五拾日割の圖にして、極樂東門まで、道中年數、合せて三百六拾八億九千貳百三萬九千貳百五拾六年百貳拾壹日なり。但六拾四文、旅籠代、三拾貳文中食代、二口惣圖して、五拾億萬貫なり。わらんぢ代七文づゝにして、代圖りて、貳千六百四億千六百六拾六萬四千六百六拾六貫四拾四文なり。上

戸は、酒代一日拾貳文、下戸は餅代、一日拾貳文圖りて、六千貳百五拾億貫なり。道中入用高三口〆五萬八千八百六拾四億千六百六拾六萬六千六百六拾四文なり。此の兩替いたし、金相借四貫四百文にして、右金高壹萬三千三百七拾五億九千四百六拾貳萬六千九百六拾九兩貳歩と、錢五百六拾四文なり。これを、千兩箱に詰めて、拾億三萬三千七百五拾九萬四千七百箱なり。極樂東門まで、右金高駄賃等雇り候時は、誠に、莫大の入用に候。是まで、果行候人々多有之候へども、日本開闢より、漸、貳千餘年なれど、日本初りよりの死人、いまだ、極樂東門へ到着せし者、一人も無之事故、今以て、一人もたより無之こそ尤の道理なれ。右の金高、無之人々は、必々、往生卒爾に願ふべからず。然れども、如來は、貧富貴賤老若男女共に、いたり安きやうにとかせらるれども、中々つきせぬ六道の小遣念佛にては思ひもよらぬ事なり。隨分々々息災にして、うまい物を喰、したい事をするが肝要なるべし。（「文外註」現今の金貨にて見るときは、貫を圓、十文を錢、一文を厘と見るべし、又、文中、日本開闢より云々二千餘年とあるは、くはしからず・筆者僧なれば、おかろからぬなるべし。）

右は、只、聞しまゝを話申すまでにて、數量等の算用はいまだ、試申さぬなり。此のものがたりのごとく、澤山に金銀を貯へ、拾萬億土の道中を經て、やう／＼念佛や題目の道案内にて、極樂へ着た所が、公の話給ふ儉約にては、あまり安樂な事もなかるべしといひつつ、互に手をうちて笑ひになりぬ。

才くらべ

蓬生屋女史

駿馬は骨になりても、なほ人を驚かす、清少納言老いさらぼひ、今は骨と皮とのみ。清輔がむかし住みける家に垣も屋も破れながらなほ住みけるに、殿上人等車いかめしく仕立てゝ、其の家の前を過ぎながら、あはれ納言の住み家なり、あやしうはなりはてけるよとあざけりつゝ、車ながら過ぎむとせしに、少納言內に此の

ことを聞きて、直ちに簾をかゝげて、駿馬の骨かはずやあると、殿上人大におどろき、且つ耻ぢて、返言もなく、足はやに通り過ぎたり。其の聲は老いたれど其の才學のほどはなは遠く人をして三舎をさけしめぬ。

○

古へ宇治の祭といへど、大内の女中をはじめ、上より下まで皆出であひ、押しあひて、あとより行きたる人は後りへにありて見ることも叶はず、さる中にもなは位、威勢ある人は前車をのけて前に立ちぬ、平治の頃なりき、此の祭祀に、例のごとく混雑し、車はひしひしとかためきて動きもやらぬ折りしも、小松殿の入らせ給ふとて、前の車の五六輛、忽ちにのきて、重盛が車を入れかへたり。ある人、小松殿は仁あり、如何に大臣なれどとて前車をのけて進み見給ふことはせじ、彼は必ず、先きに車のみおこし置き給ひしならめと、出る車を見しに、けにみな空車なりしとぞ。いと用意よき事なり。

禽獸の言行（つゞき）

田端の隱居

たて髪のあるにもなく、四つ足のあるにもあらねど、馬の如く飛びはね走りありく。さりとて駿馬ならば骨すらも價値あるべきを、田舎の爺さへに、鎌にて撫で切りにしてやらまほしとそしらる、さながら駑馬ほどの價もなし。かゝるを人呼びてた傳馬と云ふ。馬の人に轉じたりといふにや。さりとてあまりに落ち付すぎのろ〳〵となしたるを、暗黒より牛を引き出すごとしと例ふ。又れなどじの奥様と例へらるゝあり。それは、あまりにしたらなくて、つゝれやうのものを引きありくさま、かのうじ虫即ちおなどじの何をか引きずりありくさまに似たれどなりとぞ、主の家にありて、家をも守らず、忠々と口にはしながら、人知らず物を引き出し、彼方此方へはこび出し、やがては大なる穴

をさへ明くるに至る。かゝるを鼠に似たるものといふ。さらずとも物をつまみ、引き出すを頭の黒き鼠とす。されどまたさやうの者は徒らものと呼びおかむすむなれど、己れが强慾に走り、人知らず主を亡ぼし、國家を滅す。かやうの如き大不忠、大惡を獅子心中の虫とて、獅子のはらわたにすみ、其の肉を食ひ、其の血を吸ひ遂に獅子をして伏れしむ。惡みてもなほあまりある行ひとや云はまし。

（未完）

家庭の花

後篇（承前）

小倉山人

恩師川上霞峰先生、程なく霞村が宿に引きかへされ、霞村嫁御は今宵見ゆるぞ、外に準備は何んにも要らぬ、たゞこの邊を少しばかり洒掃しておけ、それでは私は又夕方、はゝ忙しい事じやのう、どれ煙草一服召させんともし給はず、待せし車に飛び乘られ、吉藏急いだ、今日は一骨折つてくれい。

世の中の人の種類は春の花より色々あり、美しいが上にも美しい嫁を迎へて、一生眺めて嬉しがらうの野心ある男ならば、今宵がいよいよ三々九度の其處ぞとおもへば、胸にうれしさ動悸つきて、髮も剪まうし髭も剃らうし、湯にも浴りて人知れず、眉に唾を附けるもあらうに、これは又落着いた聟どの、秋の日なれば最う長からず、やがて花嫁見ゆべきに、髮剪まうでも無けれど、湯に一つ浴らうでなく、尤もこれは貧ゆゑなれど、衣服一枚何うしやうの所存もなく、机に向ひて頬杖つくづく、何時も北鳴の神鳴樣、雲きほひ風立ちあるゝ夕立の節も、雪降る冬の寒きにも、垢てらてらの物一枚、暑さ血を吸ふ夏去り來れば、裏を解いて單物なり浴衣なり、寒さ身に染む冬去り來れば、裏を合せて袷なり綿入なり、芽出たう存じまゐらせ候ふの春着にも、當年は嚴しいお暑さでござりまするのお盆にも、これ一枚が緋威なれば、縞の消ゆたは勿論のこ

となり、彼方此方大分破損して、冬は風めが遠慮なく體温を吸ひ取りて、ヲヽ寒い／＼と身ぶるひ爲せるも愴しゝ、人もこれほど貧乏しては、いかな英雄豪傑でも、意氣次第に消沈して、素人相撲で一向手が出す、見事に世から投げられて、寒中の龜の子ほど首を縮め、菜の葉のやうな顔をして、何時でも貧乏鬮を引つ張り、その事にも此の事にも、甘い所は他から掴まれ、握屁むかり臭されて、何時もくさ／＼爲ねば成らず、さりとは糞いまし／＼しき世の中ぞかし。

恩師の言葉に嘘僞のあらう筈なし、それではいよ／＼今晩來るのか、それとも夢ではあるまいか、夢ならずとも或ひは、又谷中の森には昔から、いたづら狸の住めりと云へば、其奴恩師の姿に化けて、われを弄りに來たのではあるまいかなど、獨り心を痛むる所に、桐生樣のお宅は此方か、川上から參りました、旦那も追ツつけお來しあるべし、兎に角これをと差出すは、六疊敷の段通と水引をかけたる一包、その他一封の手紙添へたり。お使ひ御苦勞、お宅へよろしく、御惠贈の御品々、確に頂戴仕りぬ、アヽこれはお忽々樣、お茶一つも差進げませいで、はい、左樣ならと見送つて、眼もきよろ／＼と讀み下す手紙の文句に霞峰先生、師弟の情も濃き墨にて、水莖の跡あざやかに、輕少ながら御祝儀の御しるしまでに、失禮ながら金子五圓差出し申し候ふ、これにて温飩なり蕎麥なり、他に酒の少々も御用意あらむ然るべく候ふ以上。霞村手紙を再讀し、これではいよ／＼本物なりと目を覺し、隣家に行きて時刻を問へば、されば今の上野の鐘は確に三時と聞きましたといふに、いや其奴は大變さやうなれば飛んで歸り、摺木のやうな箒に掃除の眞似方、段通手早く敷込んで、蕎麥屋に飛ぶも今宵の聟、酒屋に急ぐる今宵の聟、さりとは忙さ聟どのならずや。

それも此れも霞村が手一つ、今宵の聟が身悶して忙しがるを、老母は何處へ風が吹くかといふやう顔、現在のわが子が一生連れ添ふへき嫁、今宵目出たく嫁ぐと

いふに、わが子とては霞村一人の親の身で、さりとは嬉しうもないことか、火鉢の前に苦り切つて、炭團を煙管に轉す惡らしさ、他人ならばヱヽこヽな糞老婆めがと、打ちも爲べく蹴りも爲べきに、孝心深き霞村がことヽて、これを少しも怨むる色なく、たヾこの度來たる新婦の處爲、母が心に愜ふや否やを氣つかふ殊勝さ、世に有がたき此の一事のみにても、霞村が行末の惡しかる可きやは。

晩秋の日は何時しか暮に迫りたり、上野の暮鐘耳に響きて、夕霧淡き谷中の森には、塒を爭ふ鳥の聲、これに驚き吠ゆる犬、續いて聞ゆる車輪の音、ソレ最う來たかと霞村は障子を開けたり立てたり、氣も騷々と落着かず、辛きものなり此れも亦。

それかと思ひし今の車は、町眞直に行き過ぎたり。小兒らしくも霞村は胸を撫でをろし、アヽまあ好かつた、彼れでは無かりし。胸の動悸の治まるまで、切ては來ることなかれなど、幾歳に成りても心耻しきはこの時なりかし。

霞村一息吐く間もあらせず、今度は遁れぬ人の氣合の表にするに、ソレ來た、今度こそ間違なしと、駈寄りて障子に片手はかけしものから、未だ向ふより聲もかけぬに、われから進んで障子を引開け、これは〳〵入らつしやいまし、桐生霞村が世をわび住ひは此方でござる、サア〳〵とも云ひかねて、又直と後退り、日頃は直と正直なる男なれども、今日ばかりはそれと知りつヽ机に凭れて、動悸めく胸を拳にをさへ、先から聲をかくるまで、素知らぬ顏して澄し込んだり、人には場合が色々の事を敎へてくれるものぞかし。

桐生樣のお宅は此方か、御免下さいまし、もし御免下さいまし、と訪ふ聲は恩師にあらず、また例の淸川が聲にもあらぬに、これは不思議と突立つ霞村、踏み寄つて障子を開くれば、御免下さいまし、こらさのどッこいせと、屈強なる人足の荒男が二人して、擔き込む箪笥は、この節中々安うは買へず、而も何うやら重さ

うに見ねぬ、長持こそ無けれ、續いて擔き込む釣臺には、嫁御の諸道具一切これに納め奉り候ふ程の景氣に、其處邊の嫗嬶暗いほど集つて來て、さりとは長屋に過ぎた嫁御ぞ、妬むがやうに羨むも淺間し、さすがの老母も胆を潰して、寒いからとて火鉢の前に慾がその儘座らせてれかず、それと見るより煙管投捨て、最も元氣よく近寄りて、簞笥を始め所狹きまで、人足どもが置いて行きたる諸道具に目を通し、我れを忘れて我子に向ひ、而も莞爾打笑みて、今度の嫁は本物だ、このまあ道具の立派さは。

霞村はいよ〳〵夢心地、さては狸の所業かと、心ひそかに題目を唱へつゝ、件の簞笥を始めとして、諸道具を熟々視れど、根が確なる本物なれど、怪しい事のあらう筈なく、簞笥は簞笥、鏡臺は鏡臺にて、別段怪しきところも無きに、首をかたげて茫然たり。折から表にがら〳〵ごろりと來て止まる一臺ならぬ車輛の音に、さてこそ來たれ花婦御、會はゞ何んとか挨拶すべき、さてもさて氣がゝりな、アゝこりや頓に死にたう成つたなど、嫁が餘りの大仕懸に素直なるほど氣の揉み方も烈し。間も無く響く駒下駄の優しき音は彼れが例のか。一同が衣の音さや〳〵と打響きて、障子越にも芬と鼻を撲つ薫物のかをり何んともいへぬ　霞村は縮み、木石ならねど無論嬉しさも胸を衝いて、殆んど腰の脱きたるをも御承知なきにや、恩師の君は御威勢好き御聲にて、霞村ッ、こゝ開けい、立派な嫁御を迎へて來たぞ。

（後篇未完）

梅の下風（十九）

白魚女史

紫はなほあけを奪はむとし、馮司は旅宿へ歸りてなほも巧みをこらさむとこまぬく腕ときもせず、れ早明日は云ひ損ねまひぞと云へど、外によき思案の出でたるげもなし、おくれぞれなし詮議の庭越前の守樣は、例

の處へ座をしめ、馮司、れはや、傳吉夫婦を呼び立てられ、また兼て召しれきたる伊東、川崎の文盲役人をも呼び立つれで、鳥なき里の蝙蝠と日來は權を振り、威張ちらせども、今日は糠づき虫の頭も上らず、こら其處の伊東、川崎と越前守さまの呼ぶる丶に二人ははつとの答もはや、慄ふやうなり。こりや、清兵衛、正直。傳吉の件に付き詮議したるところ、誠に以て曖昧なり、詮議せしかど、申立てよとあるに、川崎はわな丶く〳〵、馮司の云ひ立てを申、それにより取調候に、さまざまの證據遂に逃れ得で傳吉白狀におよびたる樣子、己れが惡しき處をかくし、道理らしく申立つるに、さてく〳〵明白なる證、かくし得られて、白狀に及びたりとさやうか、傳吉と越前の守さまの問ひに、傳吉も少しく激し、否決してさやうには御座りませぬ。先度も申し上げたるごとく、私はつゆ殺したる覺えこれなき旨を云ひ說き候ひしかど、數ならぬ言の葉は信じ玉はで苦しき拷問、それにえ堪へて、何も數ならぬ身とあきらめて罪ならぬ罪に服したるは先きの日に申上げしごとくなりとの答へに、越前の守さまは二人の役人を見られ、正しき証とは夫れのみか、して傳吉が指添如何ありしぞとの問ひに、二人は不面目頭を搔き〳〵それはとあるに、越前守殿はつたと睨まれ、何とそれはそれは遂調べざりしと、けしからぬ、して衣服の血は裾のみなりしや、外にもはねたる如きあとありしか。それも、それも何ぞありしやうなりしと、やうとは何ぞ、詮議する身が、さやうのところを調べずして何かはする、して火打袋は全く傳吉のに相違なきか、手をもしらべたるかと越前の守のをごそかの問ひに、二人はたゞ頭も上らず、返答も暫らく絕えたるを、馮司すゝみ出で丶、恐れながら申し上げます。傳吉衣の血は裾のみには候はず、袖にも胸のあたりにもはねをり候は正しく人を切りたる證、又私は日來親類のことゝて傳吉の手をもよく存じ居り候が火打袋の字は傳吉の手に相違御座なく候とあるによく〳〵明白



なる証據こや此處に取り出せいとあるに、下役ども畏りて取り出すは、傳吉が血のつきし衣、火打袋、また指添なるを、越前守殿、手に取られ、馮司、何處に血のはねたる處がある。また指添とて、拭ひたる跡も見ねず、うたがはしきは火打袋の手、之も似て非なるもにのはあらぬか。これ清兵衛、外に如何なる明白の證據がある、いざ、此處に上げいとあれど、二人は頭を下げしのみ返答もなきに、大岡殿はつたと睨まれ、かやうの證を以て明白とす、まつ暗き詮議けしからぬ、して、傳吉山を横領せりとあるが、左樣の儀これありしか、二人はます／＼頭に重き石置る丶心地やうやう少しく頭を上げ、それは去年馮司の申し立にて、元來治め方もよろしからねど誠と存じて、して、百姓どもより莊屋がへのことを申し立てしが、それは、それは何とあるぞ、喜平、太郎平を呼び出せとの下知の下にかねて召しある喜平、太郎平出で來り、そちは村の組頭なれど、何事もよく存じ居らむ、傳吉が村の持山を横領せしとさることありしや、また傳吉私利を逞しくするを、百姓共いとひて馮司に莊屋役をかへんしたるか、何事も明白に申せ、申さぬは上を欺くなれぞ罪あるぞよとの言葉に、二人もはつと平伏し、馮司が横領致しましたは存ずれど、傳吉がさやうのことは存せず、太平どん知つてるかと、喜平は太郎平にゆづるに喜平どんの知らぬ事、何れらが知るものか、れら傳吉どんにこそ莊屋になつて呉れと願つたことはあつたが馮司どんになつて呉れと頼んだ事は知らぬ、喜平どん知つてるか己らもちつとも知らん。恐れながらさやうの事は少しも私どもは存んじ申しませぬと又平伏するに、馮司は何か口の中につぶやくも笑止なり。

越前の守さまは、やがて詮議をかへ、馮司に向ひ、して、猿島川原の死骸首もなきに、どうして庄治郎夫婦と分りたるぞと問ひに、はい、それは、衣服より襦袢まで悴夫婦のにまがふ方は御坐りませぬとに、なるほど、衣服を見て悴であるとれもふは道理なり。して

庄治郎には何かしるしはなかりしかと問はせ給ふに、はい、力といふ字が彫つて御座ります。ふん、どうして力と云ふ字をほつたな、雲助やうの身にする事をして、お早、お花には何か疵があるかとのお尋に、い丶へ御座りませぬ。フン、ないか、全くないか、はい、少さい時から傍らはなさず育てた娘で御坐りますから、よつく存んじて居ります、針一本立てたあとは御坐りませぬとの急度の返答に、フン、さやうか全くなきか、なきならぞ、彼の死骸は違ふてをるぞと、越前の守の言葉に、馮司はあわて丶お早に向ひ、あるにはあらずや、左の腕に源治郎命と彫りしと云ふことを兼ねて聞きたるが、そちは忘れてかと、こ丶ろづくれぞあなさうなりしと、お早いまさら云ひそこねしを驚くも笑止なり。





文林

春雪散風　　東久世通禧

梅かをるをすのすきまのはる風に
ゆきの花さへちりかゝりけり

老松　　佐々木高行

年をへし老木のまつのふかみどり
さかえてみゆる志賀のからさき

大原女　　久我建通

大はらをけふも出町にまちつれて
みやこの市にましぞうるなり

海邊霞　　津輕承昭

いづの海こゝろあてなる七しまも
八重にかすみのたち隔てつゝ

閑中鶯　　長谷信成

世の中にうとき住ひもうぐひすの
こゑはなか〳〵したしかり鳬

旅宿曉　諏訪忠元

とりがねに夢さまされて旅やかた
はや立ちいづる人も有りけり

徳川光圀卿　宮地嚴夫

西やまのつきのひかりは世の中を
てらすかゞみと成にけるかな

早春雪　北郷久政

初わか菜もえしところもみえぬ迄
けさあわゆきのふり隱しけり

朝鶯　阪正臣

うぐひすは朝な朝なきて鳴らめど
聞ぬ日もありはるのねぶりに

梅初開　島多豆夫

東風ふけどうめこそかをれ沫雪の
とくれど花もひもやとくらん

垣若草　遠山英一

ゑのころも猫も遊べる日あたりの
垣根の小ぐさもえいでにけり

灘霞　藤井行麿

せどの海かすみのすゑは眞金ふく
吉備のおほしま兒島なるらん

雪埋松　島宮太郎

波にのみ影をのこしてふるゆきに
うづもれにけりからさきの松

霞知春　三輪義方

佐保ひめの霞のころもうちなびき
春のよそひに世はなりにけり

肥後國玉名郡長小田の里人森川麒三郎が八十八の賀宴につらなりて　佐々豐水

玉杵名姫神田のいねの八穂米の
よはひ八十度かさねますらん

おなじ宴に鮭魚の肴あり物名鮭の魚

世の中のうれひをさけのいをやすく
ねてわかさましもりかはの宿

月下思故人　帆足正久
ともに見し人はやいづら久方の
月はむかしにかはらぬものを

都霞　足立正枝
友よぶ田鶴のなく音も長閑にて
みやこの空にかすみたなびく

道臣命　近衛貞子
さまざまに心くだきてみいくさの
道のしをりとなりしきみかな

張良　蜂須賀隨子
しるべにと踏ゑるしたる跡みれど
拾ひしくつもかひはありけり

渓梅　西四辻茂子
たに川の氷ながるゝはるかぜに
梅が香とほくにほひぬるかな

山家梅　柳原愛子
木がらしの吹すさびつる山さとも
うめさきしより人ぞとひくる

江上霞　小池道子
水鳥のたつ音たえて大くらの
いり江のどかにかすむ春かな

森鶯　下田歌子
こゝろあての田中の森にきてみれど
注連のうちなりうぐひすの聲

早春柳　保科節子
吹かせはまだ寒けれどうちなびく
やなぎのいとは春めきにけり

霞添山色　岩崎寧子
常とはにみどりかはらぬ松やまも
かすみたなびき春めきにけり

引田部赤猪子　三宅龍子
忘られし身をぞおもはで八十まで

かへぬみさをのあはれなる哉　　小川直子

石川丈山

いしかはやせみの小川に清きなの。
流れて千代もたえずぞありける

江上霞　　安東菊子

梓ゆみはるきにけりとみしな江に
やがてたなびくはるかすみ哉

朝鶯　　士岐いく子

朝日影にほふそのふのうめがえに
なくうぐひすの聲もかをれる

雨中梅　　内田遊歌子

のどかにも匂ひくるかな風もなく
はるさめそゝぐにはの梅が香

窓前梅　　足立みつを子

窓の戸もさしかねてけり昨日今日
ゆふべの風ににほふうめが香

庭の梅さきそめたるを見てよめる

長歌并短歌　　酒井喜雄

わがやどの梅のはやしに　きのふまで雪はふりしを
去かすがふ春ざりくれど　きえざりし雪もけぬれど
なかざりし鳥もきなきて　やゝ〳〵に長閑になりぬ
やゝ〳〵に長閑なりける　朝庭におりたちみれど
梅の花ひとつさきけり　夕庭におりたちみれど
ふたつみつ薫りそめけり　かきかぞへ十日もへなど
雪をしもあざむくむかり　白妙にさきのさかりは
おもふどち袖ふりはへて　まがねぢを車はしらせ
月が瀬に信達にゆきて　ゆた〳〵に梅見あそびん
春日たぬしも　（信達は河内の金熊寺の梅溪也）

朝庭におりたちみれど梅の花
かぞふるむかりさきそめにけり

雜報



●紀元節　二月十一日は、我が皇祖神武天皇の御位につかせたまひし佳辰なり。畏こきわたりは更なり、國内おつるくまもなく、遠く海の外に住まへる臣民に至るまで、皆朝日の御旗を翻して、皇基のいよゝ固く天壤と共にきはまりなからんことを誰かは祝し奉らざるものあらん。誰かは賀し奉らざるものあらん。げにめでたきよき日にこそ。

●孝貞　羽前國南置賜郡窪田村星文五郎の後妻に節女といへるあり。夫は十餘年以前より癲狂病にかゝり、舅も去る二十八年以來中風症に罹りて起居自由ならざるに、かてゝ加へて姑も亦程なく重き病の床に臥して一家は不幸の淵に沈吟し、舅姑夫三人枕を並べて打伏したるが、節女はこれにもつゆ屈する色なく、只管病者の心を慰むるにつとめけり。たま〳〵先妻の遺子あれども、素行修まらず、屢獄に繋がれて無きにも劣りし不孝の子なるに、節女之を悲しみて涙ながらに諫むれども、つゆ改むるけしきも無けれど、今は詮なしとて、ひとり看病に心を盡し、晝夜衣帶を解かずといふ。げに其の名にそむかざる貞節めでたき婦人にして、洵に百世の龜鑑とするにたる。

●孝子　讃岐國高松市に石尾某なるものあり家貧しくして、早く妻に死別れ、また不治の難病に陷りたり。然るに其の子に兼太郎とてことし十三歳になれるがありて、晝は烟管の仕替を業とし、夜は終夜父の病を看護し、食を進め、藥を供し、家賃等もかつて缺ぎしことなく、日々斯の如くして年を超へけり。家主其の孝心を憐み、家賃を徴せず、且毎月之に米若干宛を給すといふ。德は孤ならず必ず隣あるものよ。

●孝女　陸前國仙臺市に松浦さだといふあり、元由

緒ある家柄なりしが、維新以來家道頓に衰へて、貧しく其の日を送りけるが、今より數年前、さだ女は重症にかゝりてゐたゝずなりぬ。しかるに、その娘にさき女といふありて、專心家業を勵み、懇ろに母の病をいたはり、藥餌をすゝめて乏しき處なく、母をして毫も顧慮の憂なからしむといふ。こも亦感ずべき孝子なり。

●貞婦　陸前國菅野善助といふもの、妻みわ女孝貞を以て聞えたり。明治初年夫善助精神病に罹り、常に刀鎗を以て其の妻をおびやかすこと數十回に渉ると雖も、みわ女は面を和らげて之を宥め、以てその意をむかへけり。後長子その家計に當りしかども、業に失敗して遂に死したり。こゝに於てみわ女精勵其の跡を修め、老母に奉事し、病夫を看護し、女のやさしき手一つに能く一家の生計を維持せり。村民其の行に感じ、村會の決議を經て、金五十圓を之に贈與したりといふ。

●又　神戸市藤田房次郎なるもの、僂麻窒斯にて癈疾となりしを、其の妻のぶ女懇に之を看護すること十數年一日の如く、又一子福太郎を手だすけとして下宿業を營みしも、福太郎亦病弱にして起居も時々自由ならざるに、のぶ女一層精をはげまし、夫の奉養看護に怠らず。近隣之を憐まざるはなしといふ。

●又　磐城國三春、赤松小太郎の妻にまつ女といふあり、貞節堅固の婦人なり。夫の叔父の狂疾に罹れるを看護すること數年、嘗て倦怠の色なかりけるが、ここに夫亦同病に罹り、躁狂常なきを能く慰めて其の意にさからはず、貞順至誠より出で、毫も己の勞苦を顧みず、纎手家計を維持して窮乏の憂なからしむといふ。知事金圓を下賜して其の德行を賞せり。

●篤行　兵庫縣藤原才吉なるもの、其の實父母、及び繼母、實兄に事へて孝悌を盡し、又實弟、義妹を督するに慈愛至らざるなく、兄多病なるによりて代りて家計を修め、毫も困苦を感ぜしめず、一家和睦して嘗て風波の起らざる、みな才吉の力によれりといふ。

●又　秋田市に理髮を業とする石垣某あり、其の

父は嘗て藩黌の教授たりし人にして、家庭の教育洵によろしきを得しため、子の父に事ふること厚く、禮ありて一家風をなし、父病死するに及びては其の肖像を掲げ、朝夕之に仕ふること猶生前の如しといふ。

●又　越前國三田某の下婢にゆみなるものあり、去る明治十六年同家に雇はれしこのかた、ひたすら忠勤を勵みて他念なく、同家の妻産後重患に罹りしより、悉く家事を一身に引受け、四人の子女を撫育すること猶實子の如くし、益々精勵して嘗て倦怠の色なしと。

●黒川博士の病狀　文學博士黒川眞賴翁は、過般來眼病に惱めるよし聞き及びたるが、世には既に兩眼明を失ひし如く傳ふるものあれども、さまでにはなく、唯少しく視力の乏しくなりし迄なりと確聞す、近詠に曰く、

老ぬれどおなじことはきかせられけり
　きみはちよませ萬代にませ
うたひいて丶おもへどおのかよろこびは
　むかしのひとにかはらさるらん
かづならぬ身にか丶ふれるみめくみの
　あつきが丶らにおせやいつらん

●高等女學校令は、本月八日、勅令第卅一號を以て公布せられたり。即ちその全文は

●高等女學校令

第一條　高等女學校は女子に須要なる高等普通教育を爲すを以て目的とす

第二條　北海道及び府縣に於ては高等女學校を設置すべし

前項の校數は土地の情況に應じ文部大臣の指揮を承け地方長官之を定む

第三條　前條の高等女學校の經費は北海道及び沖繩縣を除く外府縣の負擔とす

第四條　郡市町村(北海道及び沖繩縣の區を含む)又は町村學校組合は土地の情況に依り須要にして其の區域內小學教育の施設上妨なき場合に限り高等女學校を設置することを得

第五條　郡市町村立の高等女學校にして府縣立高等女學校に代用するに足るべきものあるときは地方長官に於て文部大臣の認可を受け府縣費を以て相當の補

助を與へ第二條の設置に代ふることを得

第六條　私人は本令の規定に依り高等女學校を設置することを得

第七條　高等女校の設置廢止は文部大臣の認可を受くべし

高等女學校の設置廢止に關する規則は文部大臣之を定む

第八條　公立高等女學校の位置は文部大臣の認可を經て地方長官之を定む

第九條　高等女學校の修業年限は四ヶ年とす但し土地の情況に依り一箇年を伸縮することを得

高等女學校に於ては二箇年以内の補習科を置くことを得

第十條　高等女學校に入學することを得る者は年齡十二年以上にして高等小學校第二學年の課程を卒りたる者又は之と同等の學力を有する者たるべし

第十一條　高等女學校に於ては女子に必要なる技藝を專修せんとする者の爲に技藝專修科を置くことを得

高等女學校に於ては其の卒業生に於ては其の卒業生にして某學科を專攻せんとする者の爲に專攻科を置くことを得べし

第十二條　高等女學校の學科及其の程度に關する規則は文部大臣之を定む

第十三條　高等女學校の教科書は文部大臣の檢定を經たるものに就き地方長官の認可を經て學校長之を定む但し文部大臣の檢定を經ざる教科書を使用する必要あるときは地方長官は文部大臣の認可を經て一時其の使用を認可することを得

高等女學校教科書の檢定に關する規則は文部大臣之を定む

第十四條　高等女學校の教員は文部大臣の授與したる教員免許狀を有する者たるべし但し文部大臣の定むる所に依り本文の免許狀を有せざる者を以て之に充ることを得

高等女學校教員免許狀に關する規則は文部大臣之を定む

第十五條　公立高等女學校職員の俸給旅費其の他諸給與に關する規則は文部大臣の認可を經て地方長官之を定む

第十六條　高等女學校の編制及設備に關する規則は文部大臣之を定む

第十七條　公立高等女學校に於ては授業料を徴收すべし但し特別の場合に於ては之を減免することを得

授業料入學料等に關する規則は公立學校に在りては地方長官に於て私立學校に在りては設立者に於て文部大臣の認可を經て之を定む

第十八條　本令の規定に依らざる學校は高等女學校と稱することを得ず

第十九條　本令施行の爲に必要なる規則は文部大臣之を定む

附　則

第二十條　本令は明治三十二年四月一日より施行す
地方長官は文部大臣の認可を受け本令施行の日より四箇年以内第二條の設置を延期することを得

●高等女學校編制及設備規則は、本月九日、文部省令第五號を以て公布せらる。

◎高等女學校編制及設備規則

第一條　一學校の生徒數は四百人以下とす但特別の事情あるときは六百人まで增員することを得

第二條　一學級の生徒數は三十五人とす但特別の事情あるときは五十人まで增員することを得

第三條　學級は同學年の生徒を以て編制すべし
修身、裁縫、音樂、体操及手藝に限り學年又は學級の異なる生徒を合して同時に敎授することを得

第四條　敎員は五學級以下の學校に於ては一學級に付二人以上とし五學級以上一學級を加ふる每に一人半以上の割合を以て增員すべし但一學級に付少くとも一人は他の職を兼ねず又は他の職より兼務せざることを要す

第五條　校地は學校の規模に適應なる地積を有し道德上並に衛生上に害なき所たるべし
校地內に體操場に充つべき相當の場所を備ふべし

第六條　校舍は左の諸室を備ふべし
一　生徒各學級に應ずる通常敎室
二　理科、裁縫、圖畫、音樂等の各特別敎室
三　雨中體操場
四　講堂
五　圖書室、器械室、標本室
六　職員室、生徒控所、其他所要の諸室
前項の諸室は差支なき限りに於て便宜兼用することを得

第七條　敎室の大さは一學級の生徒を容るゝに足るを度とし生徒一人に付容積百二十立方尺以上とす

第八條　道廳府縣立高等女學校に於ては寄宿舍を設くべし但特別の事情あるときは文部大臣の認可を受け寄宿舍を設けざることを得

第九條　寄宿舍には自修室、寢室、舍監室、應接所、病室、食堂、理髮室、浴室、盥漱場等を備ふべし但自修室及び寢室は便宜之を兼用することを得

第十條　自修室は生徒一人に付容積三百二十四立方尺以上寢室は四百八十立方尺以上とす

第十一條　校地內に成るべく學校長、敎員、舍監の住宅を設くべし

第十二條　圖書、器械、器具、標本、藥品、模型等は

高等女學校の學科を教授するに差支なき様之を備ふべし

附則

第十三條　此規則は明治三十二年四月一日より施行す

第十四條　既設高等女學校にして第一條の規定に依り難き事情あるときは明治三十二年三月三十一日までに其事由を具して文部大臣の指揮を受くべし

第十五條　既設高等女學校にして第六條乃至第十條の規定に依り難き事情あるときは明治三十五年三月三十一日までは之に依らざることを得

●女子高等師範學校技藝科設置　是迄の理文兩科の外に更に技藝科といふを設け、來四月より實行するといふ。其科目は倫理、教育學、國語、外國語、家事、習字、圖畫、体操にして音樂を隨意科とせり。

●東京教育博物館　は、先頃觀覽券を廢し、無料にて公衆の來觀を許し、新列品も追々加はるに依り、近來頓に來觀人多數となり、日曜祭日などには中々混雜する由なるが、其の新列品の重なるものは人體及び內臟摸形、眼珠、耳及び咽喉解剖的大形摸形、各種動物標本等にして、近日陳列せらるべきものは、東洋西洋の學者教育者肖像、新形電話機、帝國軍艦圖等なりと。

●臺灣の早産　臺灣の我が版圖に屬してより、臺北地方は日増に繁盛に趣きて、人口も愈々增加すると共に、一般の生計も愈々秩序を得、從て妊婦の如きも漸次其の數を增し、昨年七月頃には、産兒の數、百餘人なりしが、年末の調査には二百五六十人に達し、本年に入りても二十余人の出産ありたれど、目今同地に於ける初生兒の數は三百人ばかりなり。しかるに、氣候の關係にや、胎兒は大抵早熟にして、多くは九ヶ月、若くは八ヶ月にて分娩するといふ。是に就て同地在住の醫士中には、目下其の原因を研究するものありといふ。

●郵便の注意　本月十五日、遞信省より左の如き告示ありたり。

第三種(新聞雜誌)及び第五種(農産物種子)郵便物に使用する帶紙又は包裝紙には音信文其他音信の意味を有する文字を記載若くは印刷したるものを用ふることを得ず若し此等の文字を筆書したる紙片を用ふるときは第一種郵便物(書狀)とし其印刷したるものを用ひたるときは第四種郵便物(書籍寫眞等)として取扱ふべし

第四種郵便物に使用する帶紙又は包裝紙には音信文其他音信の意味

を有する文字を筆書したるものを用ふることを得ず若し此等の紙片を用ひたるものあるときは第一種郵便物として取扱ふべし

●地球の破壞說　天文學者サーロベルドボール氏の說によれば、大洋の底には早晩大なる罅隙を生じ、海水一齊に地球の中心に浸入し、爲に地球は破壞して人類の全滅する期あるへしといへり。恐ろしき愕說なり。

●船暈治療法　此頃獨乙に於て發明したる船暈の新治療法は、至極輕便なるものにして、之を惱みたるときは、赤色の眼鏡を以て暫く何處なりとも眺め、其後カロメルを服するに、忽にして苦惱を去るといふ。此發明は、エプスタン博士が、腦中の血管に對する色の勢力を研究して得たる結果により案出したるものにして、船暈は元來腦中血液の欠乏せるより起るものなるに、赤色は能く急速に血を腦中に送致するの功あるを以て、其色の眼鏡を掛けて眺むれば之が欠乏を補ひ、直ちに其の患を治するを得るなりと云ふ。

●世界第一の大男　彼の第三師團の砲兵山下眞澄は體軀の長大なるゆゑを以て近頃世に知られ、我國第一とまで稱せられたるが、こゝに世界第一といふは伊太利人にして、山下より高きこと一尺あまり、即ち身長七尺二分五厘、胸圍六尺五寸にして、徵兵檢查を受けたるも、偉大に過ぎて哨兵舍に入る能はず、旅行にも、滊車の停車場改札口よりは出入することを得ず、又普通の客舍には頭支へて乘ること能はざる等より、不合格として採用せられざりしといふ。彼は斯る長大の軀幹を有するため、かへりて其の執るべき職業なきに窮し、戶外に出づれば之を觀んとて、道路の人彼の周圍に群集するより、今は唯室內に閉ぢ籠りて徒食するのみなれど、衣食にもさし支ふるさまなりしが、又數奇心に彼を見んとて態々彼を訪ふもの日に絕ゑざるより、之に食を乞ひて纔かにその生活を保つといふ。度を越えて大に失するもなかなか用なきものにや。

●寄書

田舍女子につきて(一)

と、せ、

赤げつとの連中としいへど、田舍をやぢの事にして、

赤べこ連中としいへど、田舍女子をさげすみたる語なり、そもこの赤べこ連中といはるゝもの、如何なる幸を有ち、如何なる不幸を有するか、花の都に住み給ふ姫君達は、夢だも知り給はざらん。

明治の聖代に生れては、濱のきはみ、山の奥まで、敎育の惠みに預からぬ者は無きやうなれども、よく穿鑿すれど、案外なる思をなすこと少からず、彼等に就學を勸むる者あれど、母親は曰く、われ等は學問なくして、今日に至れりと雖も、甚しき不都合を見たることなし、學問は徒らに生意氣を習ひ、不孝の子となられて堪るものかはと、この横槍に倒るゝもの少からず、たま〳〵この難關を過ぐるものあるも、弟妹等の產まるゝことあれど、その子守りを仰せつけられて、中途退學の止むを得ざるに至る、されど當地方にては、百の學齡女兒中、三十の就學者を見る能はざる位なり、さてこれ等の二つの難關をきりぬけて、漸く尋常校を卒業するも、高等小學は數里の外にあれど、在校地の生徒にあらずど、たとひ富者の子と雖も、嚴格なる親戚を有するか、適當なる監督者を有するにあらずんど、遊學せしむること能はず、況んや、其以下の女子に於てをや。なほ況はんや高等女學校に於てをや。

されど彼等の樂は、おのづから卑猥に陷り、終に放蕩むすこの餌となり、自らその非を知らず、野合淫奔、うかれ〳〵て、末は慚恨、後悔の焰の中に葬られ、或は嫁となり、婿を貰ふも、その習慣は容易に改らず、夫婦喧嘩の荒浪、一生彼等の家庭を襲ふ、田舍の喧嘩の中裁は多く此の種のものに於てせらるゝなり、その腦髓既に全く侵犯せられたる者は、浮名を立てらるゝも、蚊のさしたる程にも感ぜず 道德の話をきくも、馬の耳に念佛と等しく、終にその非を悟る智慧なくして終らん、これ寧ろ憐むべきの極ならずや、不幸の甚しき者といふべからずや。

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　　　住所 　　　　姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むし。

文書式

題　　　住所 　　　　姓名

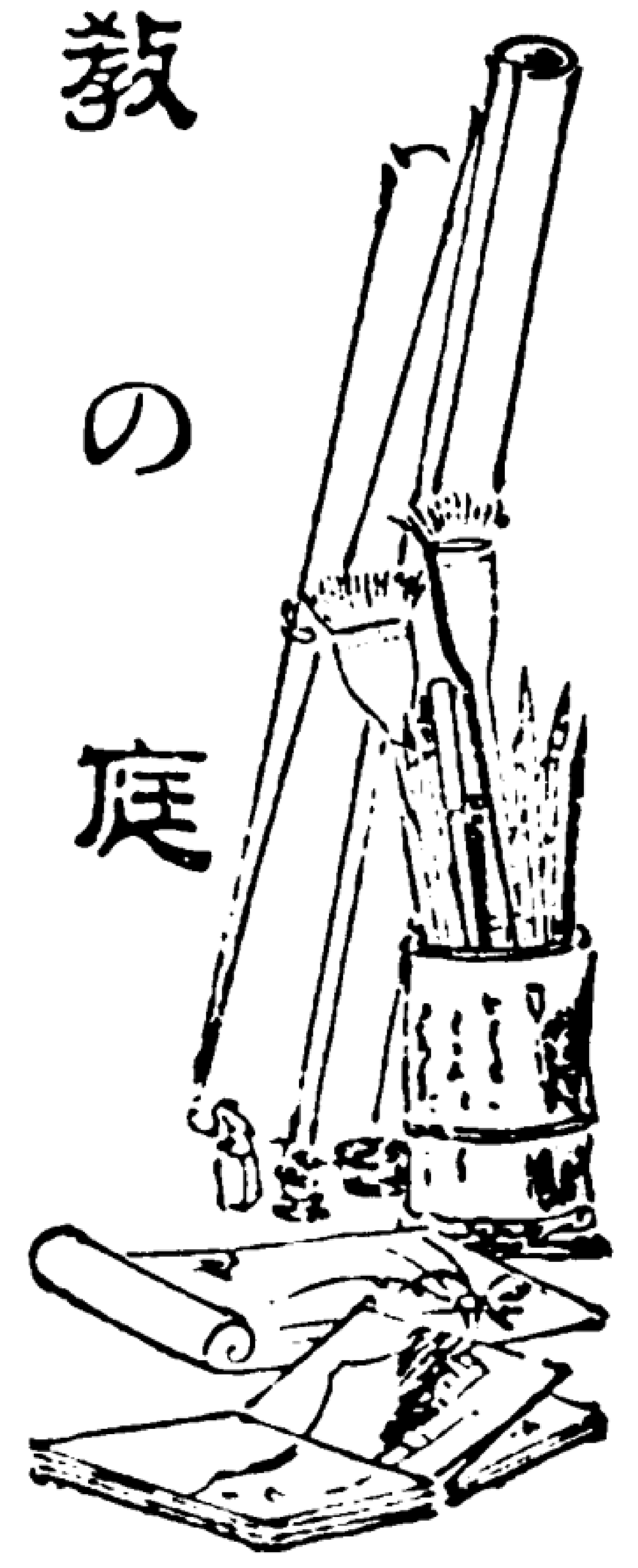
用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○書式に違ひたるは總て沒書とす。
○女子は、なにびとにても隨意に投稿することを得

明治三十二年女鑑歌文月並兼題

期日		題	〆切
三月廿日	歌	曉歸雁	三月十日〆切
	文	落第せし人を慰むる文	
四月五日	歌	花滿山	三月廿五日〆切
	文	花下に月を賞す	
四月廿日	歌	汐干狩	四月十日〆切
	文	遲咲の櫻を見て	
五月五日	歌	海邊新樹	四月廿五日〆切
	文	自ら戒むる詞	
五月廿日	歌	牡丹	五月十日〆切
	文	郭	

〆切期日に遲れたるは總て採用せず。



教の庭

二月廿日兼題　霞隔行船

天　肥後國菊池郡水次村　坂本遊多歌子

わたの原ふかくかすめどゆく船の
　きそへる聲はへだてざりけり

地　肥後國玉名郡花簇村　村上昌子

すがたこそ霞の外のものならめ
　からろのおとはたちも隔てす

人　出雲國飯石郡一宮村　山根久子

ふな人の聲はまぢかくきこゆれど
　かすみて見えぬあま小船かな

秀逸（十首）

たち渡るかすみの底やこきくらん
　かぢの音のみちかのうらふね　福岡　森やす子

こぎかへるあまの小舟の棹の音も
　かすみのうちになりにける哉　肥後　佐々富枝子

蜑小舟ゆくとも來ともわかぬまで
　かすみにけりなおきつうな原　長門　江本さち子

大比えに雪はのこれど志賀のうら
　かすみにきゆるあまのつり船　尾張　佐治玉子

行くかぎりみましと思ふ海人小舟
　いかに霞のたちかくすらむ　東京　諸井久良子

舟人のこゑはさしべにかよへども
　かすみのおくに影ぞきえゆく　大阪　福島英子

みなれ棹さしてゆくへや迷ふらん
　かすみにむせぶ宇治のかは船　新潟　外川とい子

海士小舟影はかすみてとるかぢの
　そこともわかぬ音ぞかりする　越前　山田璋子

ろの音はかすみを洩てきこゆれど
　ゆくへしられぬあまをふね哉　廣島　香川知惠子

ゆく舟の影もいつしかたちこむる
　かすみのおくになりにける哉　大隅　神宮司森子

（以下原稿到着順）

行くふねをかくすかすみのなかりせば
　きみがおもかげみえなんものを　根岸豊子

こぎてゆく舟はかすみにへだゝりぬ
　かぢのおとのみなほきこえつゝ　橋本さよ子

はてしなき海路にふかくかすみたち
　みえみえすみうかぶふねかな　志茂多磨子

すがのねの長洲のうらにはらかつる
　ふねはかすめるおきにこそこげ　佐々小琴子

菊池かは波のうね〱こきくたす
ふねはかすみのみをにかゝれり　佐々有鄰子

すたみ川かすみへたてゝみえねさも
ふねやゆくらんかちの音のする　永井さい子

こく舟のすかたはみえすなりにけり
八重にたなひくはるのかすみに　亀甲智子

高瀬かはのさかにかすむなみの上を
こきゆくふねのおさのみそする　吉富彦子

こきわけしあさは汐路にみえなから
かすみにきえてゆく小ふねかな　長野孝子

舟子等かふなうたさほくきこゆるは
かすみのおくにしほやひくらん　井口粱子

ゆく舟はそれさみえねさうちかすむ
なにはほり江にかちのおさする　平山政子

さす棹のおさなかりせはあさかすみ
わけゆくふねをそれさしらじな　森川儀子

あやにくにへたてゝけりな春かすみ
あらぬなこりのふねのゆくへを　住山哉子

みをつくしさしてこきよるあま小舟
かすみのそこにたゞよひにけり　佐々値嘉子

はる〱さかすみへたてゝ行く船は
いつくのうらのもしほかるらん　久米貞子

かちの音にあはせてうたふふな人の
こゑさへかすむはるのかはつら　岡部八代子

春かすみたなひきわたるあしたには
おきこくふねもみえわかぬかな　石井豊子

かすみ立つ春のしほ路をみわたせは
おきのしらほのみえすなりゆく　小野けさじ子

何をみてなこりをしまむみなさての　横山柳子

ふねのけふりもうちかすみつゝ

八重霞しほ路はるかにたなひきて
つりするふねの見えかくれ行く　加納花子

あまの子かこきゆく舟もみるうちに
かすみにへたつはるのうなはら　徳永九員子

船うたのこゑのみもれてこくふねの
かけみえぬまてかすみこめけり　徳永萬壽子

伊勢の海やこきゆくふねのあさきえて
かすみにかはるなみのうねうね　徳永康子

梅みにさみなかみさしてのほるらん
おさもかすみにきゆるかはふね　友永章子

海はらをこきゆくふねもはるかすみ
たなひくからにへたてられけり　堤彬子

菊池かはあら瀬をさしてゆくふねも
今朝はかすみにへたてられけり　中原虎子

行きかよふねはかすみにつゝまれて
帆かけもみえすなりにけるかな　永目甚子

ほのほのさ波路はるかにゆくふねは
かすみへたてゝ帆もみえぬかな　那須昌子

うら〱さかすみへたつるあま小舟
しほくもりせしすまのうなはら　村崎包子

こきいつる船はかすみにかくるさも
よしのさかなるはるのうなはら　黒田明子

こく船はかすみのうちにつゝまれて
かちのおさのみもれてきこゆる　小森田婦子

行く船の帆かけもそれさみえぬまて
はるをふかめてたつかすみかな　虎口資子

なにはつをいつる船ひさこゑはして
かすみへたつるそらのとけさ　溝口貞子

まほあけてみなとをいてし百千ふね
かすみかくれになりにけるかな　下田龜子

行くふねのありか見えねとふな人の
こゑそかすみのうちにきこゆる　道脇彌榮子

あなたかしかすみにとさす海はらを
かけをへたてゝ過くるつりふね　近藤波留子

あさかすみたてる波路をゆくふねは
かけもほのかにへたつとそみる　中村すゑ子

かち音はとほくきこえてなにはかた
かすみをわけてふねそこき行く　櫛田秀子

春かすみまたうすけれやへたてゝも
ふねのしら帆はもれてみゆらむ　杉山綠子

邊津ふねは遠くなりけりおきつ船は
見えすなるまてかすむうなはら　白濟いさ子

朝かすみわけつゝいりぬあまをふね
ゆくてのほとの見えわかぬまて　高島喜子

見わたせはかすみにきえてゆく船の
なみちはるかはおとのみそする　笹本さほ子

行く舟のかたほかくれてかすみけり
ほの〳〵てらすにほのあさひこ　林瑟子

うら〳〵とかすみそ立てる琵琶の海
をきのをふねのみえすなるまて　齋藤せん子

波の上にうかひて見えしはしふねも
いまはかすみのそこをゆくらん　高橋かね子

こく舟もそれとさたかにわかりぬまて
かすみはてたりはるのうなはら　佐野譏代子

おほかたの人にみせしとはるかすみ
ふねのあとさへたちかくしけん　清河照子

はるかにもすまのうらわを眺むれは　坪内晴子

かすみへたてゝかよふつりふね

見わたせはこきゆく船もほの〳〵と
かすみこめたりよさのうなつら　羽室銀子

かはかみの花とはましをはるかすみ
くたるをふねをたちへたてけり　谷口婦佐子

うらふねのこき行く音は聞えつゝ
ほかけも見えすかすむはるかな　高橋ちん子

帆眞あけて行きかふ舟のかす〳〵も
かすみのそてに見えかくれせし　四條駒子

芝のうらやきしつたひせしほかけ船
立てるかすみのおくになりぬる　下田春子

芝の海にしらほをあけて行くふねを
かすみのおくのゆきかとそみる　下田興子

いさりふねこく音のみはきこゆれと
かけはかすみのまにそきえゆく　佐野たか子

はるかすみこきわけつゝもゆく船の
いよゝかすかになりにけるかな　眞邊いや子

海士小舟ありとはこゑにしるけれと
かすみてわかぬはるのうみつら　吉岡純子

ゆく船のかけはかすみにきえはてゝ
なみのあやせともわかぬ海つら　吉岡歌子

こゝろなく深くかすみのたてるかな
いてたつひとをおくるうなちに　新井登代子

ゆく船のかちのおとのみきこえけり
かすみこめたるはるのうなはら　降田槇子

和田の原かすみやふかくたちぬらん
ゆきかふふねのかけもおほろに　穴谷わか子

ふねのみはたちこそかくせ朝かすみ
なみのひゝきをおほひやはする　淺井靜子

白帆のみほのかに見えてあさぼらけ
かすみにきゆるなみのおさかな　菊池不二子

黑けむりやがてかすみにたなびきて
うなはらさほくおほふれのゆく　酒井小楽子

みるかうちに入江のかすみたちこめて
こきゆくふれのおさのみそする　小野寺竹子

こき出てし舟のゆくへもきえにけり
しかのうみつらかすみへたてゝ　中桐杏子

おきつかせほかけも遠くゆくふれの
かけもかすみにへたてぬるかな　池谷富子

和田のはら汐路をわけて行くふれを
かくすかすみのふかくもあるかな　舘脇ます子

朝なきにこき出しふれはしら波の
あさかたもなくかすみつるかな　新海わか子

こきいてし舟もおほろにはるかすみ
たちたへてたるなみのうへかな　吾妻ちか子

帆をあけてかすみかくれにゆく船も
そらものさかにかすむはるかな　萩原章子

水のおもゝ見えわかぬまてかすみしを
へたてつゝゆくあまをふれかな　藤の戸女史

ほの〳〵さ見えかくれして行く船は
はるのかすみのうみやこくらん　高倉りの子

ゆくふれも定かに見えすなりにけり
たてるかすみのへたつなるらん　佐藤やす子

あさかすみふかく汐ちをたちこめて
おきゆくふれのこゑのみそする　上田ちよ子

あふくまの川にさをさすふなひさの
かすめるかたにこゑのきこゆる　村田竹子

まつしまの浦こきいつるあま小ふれ　村田よし子

かけは見えれさかいの音する　濱野なみ子

雲間にもかよふをふれさなかむれは
かすみのうへにかけそ見えける　花野露子

もゝちふれゆきかふかちの音たえす
かすみわたりてかけは見えれさ　海島伊登子

笛のれにみなさをいてしおほふれの
かけ見えぬまてかすみこめたり　井上まさ子

行く舟のまちかゝりしもはるかすみ
へたつろうちさいつかなりぬる　井上まき子

あさかすみ隔てゝもなほ見えにけり
おきこきわたるあまのつりふれ　松森まつ子

ゆく船の帆かけはきえてなには江の
かすみにのこるかちのおさかな　金原吉子

高瀬さすふれのゆくへこそみえぬまて
たちかさなれるはるかすみかな　香川つゆ子

あさかすみ帆かけはるかに行くふれの
さまりは蝦夷かしまれなるらむ　山本かつ子

うな原やにかたのおきもかすみけり
ほの〳〵見ゆるもろこしのふれ　山本しげい子

おほろ夜のゆみはり月さみゆるかな
かすみこめたるおきの眞帆ふれ　内本道子

ゆく舟のあさをかすみのへたてすは
行くへのかきり見おくらましを　佐々木はつ子

ゆくふれはさらても遠くなりつるを
なさてかすみのたちへたつらん　前田たけ子

眞帆あけていまやいてぬさ見し舟は
かすみがくれさはやなりにけり　仁保基子

うらうらさ立わたりたるあさかすみ
こきわけてゆくあまのつりふれ

漕きいてし船はかすみのたちこめて
　おきにからろのおさのみそする
吉田季子

舟うけて藻をかるしつかうたのみは
　かすみのこせり江津のかはつら
彌富濱子

あひきする聲のみもれてきこゐけり
　かすめるなみのおきのつりふれ
佐々富枝子

朝かすみへたてゝかちのおさすなり
　江津のみつうみふれやこくらん
鹽川滿子

こき上る舟はかすみにへたつれさ
　こゑはさやかにきこゐけるかな
山崎さく子

ゆく舟のかけはかすみてみゐれさも
　かはかみさほくさをのおさする
外川益子

なりはひさ思へはけさのさむさにも
　かすみへたてゝいさみこきゆく
田中ひろ子

和田の原なみ路をさほくゆくふれの
　こゝろにかゝるはるかすみかな
宮崎せん子

はるかすみ見わたし遠くたちこめて
　いよゝきゐゆくあまのつりふれ
名取正代子

いかはかりのさけかるらむ春かすみ
　たなひくおくに見ゆるつりふれ
坂田きみ子

こきわくる影もかすみにつゝまれて
　さしまよふらむはるのかはふれ
名取よし子

こきいてし舟もいつしかあさたゐて
　ゆくへかすみのたちこもるらん
椎野ゐき子

あるはみゐあるはかくれつ船子らか
　かけにおほろなる春かすみかな
神田新子

わかのうらゆきかふふれの聲すれさ
　すかたはみゐぬはるかすみかな
神田いゑ子

ゆくふれの影たに見ゐすなりにけり
　諏訪のみつうみかすみこめつゝ
岩波まち子

春かすみたちかされたるうなはらは
　こきゆくふれのおさのみそする
田代喜和子

舟人のうたをきこゐすは志賀の海は
　かすみはかりさ見てやすきまし
田代艶子

ゆく舟のほかけも見ゐすなりにけり
　あをうなはらはかすみふかめて
田代綾子

春かすみたなひくうらのあけほのに
　こき行くふれのみゐかくれする
伊勢うた子

うらかすみ立ちへたてすはゆく船の
　見ゆるかきりは見おくらましを
春野八重子

春かすみおほふなみちにうくふれの
　ゆくへはかちのおさにこそしれ
大友春子

たゐ〳〵に行きかふ舟の見ゆるかな
　かすみたなひくしかのみつうみ
佐藤富子

春かすみなみちゆかしくこくふれを
　立ちかくすこそうらみなりけれ
山田春子

浦の名のかすみをわけて漕くふれの
　かぢのおささへいまはきこゐす
澤田せい子

ゆく舟の見ゐみ見ゐすみなりぬるは
　たてるかすみのふかきなるらん
帆足つる子

ゆく舟をなささはかくすはるかすみ
　われにつれなきひさやのりたる
荻野舍久子

あさひらきみなさないつる大ふれの
　ふゐの音すなりかすみかくれに
國井みき子

見わたせは沖ゆくふれもおほろなり
　かすみこめたる志賀のうらなみ
羽室靜衛子

あまのよふこゑのみもれてゆく舟の
　かすもよまれすかすむうなはら
河田いし子

漕きわかれかけは消えゆく友の船に
しはしかすみのはれよとそ思ふ　齋藤梅子

ゆく舟のありやなしやもわかぬまて
志賀のおほわたかすみこめたり　村手英子

春かすみへたつもうしやくたてなき
ともをのせ行くふねの帆かけを　宮川流子

かちのともたち隔てたる田子の浦の
かすみのおくやふなちなるらむ　椒山つう子

立ちかくす霞そつらきほのほのと
ゆくふねをたにしはしみましを　高橋信子

わたりする船はそれともわかぬ間に
かすみこめたるはるのうなはら　名倉節子

いかはかり別れ路ならはつらからん
かすみへたつるみなと出のふね　西　艶子

わたのはら汐ちはるかにかすむなり
ゆくへやいつこあまのつりふね　香澄梅代子

海はらはやへのかすみにとざされて
ゆくへもしらぬあまのつりふね　關口みつ子

あさかすみたちかくしたる船のほの
いよ〳〵しろくみえわたるかな　足立ます子

よせかへる波もさわかてあさなきの
かすみにしつむあまのつりふね　紫花信子

おもしろくみえこそ渡れまほかたほ
かすみをくたるとれのかはふね　足立久二子

からろおすおとのみもれて　ふかき
かすみのおくをかへるかはふね　足立まつ子

はるかすみたちへたつれと大ふねの
ほのみえわたるあさほらけかな　足立宗子

春かすみたなひくみをにのほり行く
をふねのかちのおときこゆなり　足立とみ子

はる〳〵とかすみのおくをこき渡る
ふねのゆくへやいつこなるらん　磯野こと子

すみたかはかすみわたりてこく船の
おとのみそするはるのゆふくれ　長松かね子

こきいつる船をへたてゝたちそむる
かすみのそてにかゝるうらなみ　笹子茂子

歸りますまてはうらみんはるかすみ
背子乗りいつるふねをかくせは　數島花子

すまのうらつりする船のかけもなし
かすみのうみにこきやいりけん　笹子うた子

筆あらは繪にもかゝまし一すちの
かすみへたてゝはしるつりふね　綿野りき子

行く船のおきにおとのみきこゆなり
のとけきはるのかすみへたてゝ　馬場節子

朝かすみちかのうらわに立ちこめて
をちのふね〳〵見えすなり行く　賀屋蕊子

海の上もはるのけしきになるみかた
かすみの奥に見ゆるつりふね　泉　さい子

春かすみ立ちへたてたる海士をふね
よするみなとはなれもまとはん　泉　久頁子

いましはし見おくる船をこゝろなき
かすみのなみのへたてつるかな　羽根田米子

こく人のゆくへもさらに見えぬまて
かすみこめたりしかのうなつら　中山登美子

芝うらやしはしもたゝぬかちのおと
かすむあなたの船をしそおもふ　小向きみ子

うちかすむすみよし浦のあさなきに
こきゆく船のかけをしそおもふ　吉田元子

すまの浦かすみはふれをつゝめさも
さもよひかはすこゑもろゝなり
杉田のぶ子

みなさをはいまこきいてし船なから
はやもかすみのおくになりぬろ
三浦ひで子

漕くこくたなひきそめてゆくふれを
かすみこめたりしほかまのうら
青木たま子

あさまたき海原さほくゆくふれは
かすみかくれにみねつかくれつ
池澤天興子

船うたの洩れきこゆなり立ちこむろ
かすみのおくにふれや漕くらむ
玉井ふく子

見わたせは沖行くふれはほのかにも
かすみのおくになりにけろかな
松澤重子

みろうちに船はみねすもなりにけり
かすみこめたろはろのうなはら
坂田康子

みろうちに行くおほ船のほかけをは
かすみへたつろはゑのうなはら
八木沼里子

からろおす音はかりしてたけしはの
うらわはろかにたつかすみかな
日高かず子

あさほらけうな原さしてゆくふれの
かけみねぬまてかすみこめけり
佐々敏子

ゆくふれはかすみの奥になりにけり
なみ路にかちのおさものこして
白石梅子

わたのはらわけゆく舟も見ねぬまて
かすみたなひくあさほらけかな
服部桑子

賤しおくけふりをやかてかすみにて
見ろ見ろふれは見ねすなりゆく
美濃起美子

音のみはたかしのはまのもゝちふれ
かすみへたてゝこきいつろかな
岡本鶴子

佐保姫のころものそてにつゝみけん
岡本純子

こきゆくふれのおさのみそすろ

黒ふれのゆくへも見ねぬはろのうみ
笛のおさはかりかすみのこして
仁保しま子

八重かすみ立へたてゝもへたてぬは
こきゆくふれのかいのおさかな
尾田ふく子

みなれさをさして行くへもわかねまて
かすみへたつろよさのかはふれ
戸塚鐵子

春かすみなみ間はろかにゆくふれの
雲かさまかふかけをしそおもふ
岡田秀子

かちのおさ波にのこして行くふれの
かけ見ねぬまてかすみこめけり
藤澤萩子

みわたせはなみうつこさに進みゆく
あまのをふれのかけそかすめろ
絹川ますゑ子

うら〳〵さ浪ちかすみてこきいつろ
あまの小ふれのかすそきねゆく
日吉あさ子

眞帆片帆みれささたかにわかねまて
うなはらさほくかすみこめけり
河原芳子

沖なかになひくかすみのあやなすは
ふれのなこりのけふりそひけん
曲田常世子

ゆく船をさすかすみのふかけれは
はろのうみへはゆかしかりけり
曲田さの子

たちこめてかすみは沖をへたつれさ
うたふこゑにそふれは知らろゝ
曲田すゞ子

眞帆片帆あけてあそへろおきなかの
れふみねぬまてかすむのさけさ
宮脇雪枝子

歌ふこゑ押すろのおさにしられけり
かすみへたてしふれのゆくへを
佐藤榮枝子

うら〳〵さかすみにこめて行く船の
見ねては消ゆろしなかはのおき
高砂きよ子

與謝の海かすみへたてゝゆくふねの
かた帆にかゝるあまのはしたて　高砂菊代子

芝うらのかすみてふねは見えねとも
ほのかにきこゆあまのよひこゑ　横手たつ子

和田の原かすみてふねは見えねとも
たゞひとすちのけふりのみ見ゆ　横手こう子

ほをあけてうな原とほくゆくふねの
かけわかぬまてかすむけふかな　濱野時子

沖さしてこきゆくふねもたえ〳〵に
かすむうみちにみえかくれする　深谷清子

船ひともこきゆくさきやまよふらん
なきさもわかぬふかきかすみに　北原すゑ子

見ゆるかきり送らまほしく思へとも
かすみにふねのかけほかのなり　眞島千鶴子

見るかうちにわけゆく船のあともなし
かすみこめたるちぬのうなはら　稲原壽美禮子

くろ船のいまやゆくらんけむりたち
おきのかすみのふかくなる見ゆ　林八重子

松らかたいまひもときしわか脊子か
ほかげへたつるかすみつれなや　林千代子

かすみ立つ八重の汐路はゆふなきに
つらなる帆なみ見えすなりゆく　林しげり子

うら〳〵となひく霞をほにあけて
わけゆくあまのふねのゆたけさ　久保井くう子

おほつかなゆくへもしらてこく船の
かすみにしつむけふをしそ思ふ　小幡光江子

まほかけてなみ路しつかにゆく船を
たちへたてたるあさかすみかな　横山壽賀子

あはちしまほのかにみえて明石かた　賀茂笹子

あかすかすめりおきのちふねも

うな原のかすみのなかにひとすちの
くろきはふねのけふりなるらむ　河合ぬひ子

沖へゆくふねの見るめもわかぬまて
かすむうらわのはるののとけさ　村田多豆子

ゆく船のほかけもみえすなりにけり
かすみのおくにふねのれはして　服部蔦子

船うたのこゑをのこしてゆくへをは
ひきかくしたりからことのうら　加藤加[illegible]子

いさるとてこきゆく船はたちこむる
かすみにきえてこゑのみそする　東みさほ子

あを海原こきゆくふねもたちこむる
かすみにそれと見えわかぬなり　松本みさり子

たちつゝくかすみの中にこき入りぬ
海士かをふねはすかたかくして　梅本かほる子

のとかなる汐路こきゆく漁士小ふね
たてるかすみにかけはかくれぬ　松本みよし子

沖とほくかすみわたりてゆくふねの
ほかけも見えぬはるのうなはら　西村章子

間ちかくも楫のおとしてふなかけは
かすみにうすしたけしはのうら　都水春子

立ちわたるかすみを縫ひてくふねは
帆かけよりこそうすれそめけれ　目黒佐喜子

いつこまてゆく舟ならんかすかにも
かすみをもれて見ゆるしらほは　原敬子

櫓音のみよそにひゝきてあま小ふね
かすみのうちに見えすなりゆく　竹腰隆子

たかさこの邊にいてたつ夫のふねは
かすみのをちに見えすなりゆく　竹腰八千代子

いつまでもなごりつきせぬ友ふねを
いまはさかくすはるかすみかな　服部かつみ子

まつらのうみ舟こきゆけはしま山の
ありさも見ゑすたつかすみかな　城りゑ子

行く舟のかちの音のみのこしおきて
かすみわたれるはるのうみつら　森こさ子

はま千鳥うかふさ見しはおきあひの
かすみへたてゝ行けるふねなり　所佐以子

春かすみたてるなみちを行くふねは
あるさはすれさ見るよしそなき　北登秀子

春かすみかすむなみちをこくふねは
めにこそ見ゑねおさののさけさ　日野暦子

見渡せはおきつなみまをゆくふねは
かすみのなかにかけそきゑゆく　松島きみ子

くろ舟をたちかくしたる八重かすみ
ひさへはのころけむりなるらん　秋野つゆ子

白なみのうへさへはるのたちぬれは
かすみをのせぬふねたにもなし　齋藤かつ子

行く船はかすみのなかにかくろひて
さろやからろのおさのみそする　齋藤よし子

行くふれのなごりを惜しみなかむれは
うしやかすみのたちへたてける　根岸さと子

須磨のうらや沖ゆくふねはかすめさも
なほみさりなるあはちしまやま　小村信子

行く船のほかけへたてゝうらうらさ
なみにたちそふはるかすみかな　作良かむ子

ろのおさはちかくすれさも行く船の
かけさへ見ゑすたつかすみかな　岸なみ子

行く船はなみちささもにかけきゑて　皆川清子

打ちなびくかすみのうちをゆく船の
かすみにのころふなひさのこゑ　尾崎嘉子

海士舟もかすみかくれさなりにけり
ゆくてもわかすなりにけるかな　安孫子かづ子

ほのぼのさかすむ帆かけや袖かうら
よせ來るなみのおさばかりして　山田婦美子

さゞめむさせるもかひなし行く舟の
いくへへたつる海士のつりふれ　山田靜子

行く舟のかけはやうやくきゑうせて
こゑもかすみにへたてぬるかな　青木春子

行く船は八重のかすみにへたつれさ
かすみのなかにもるゝふゑのれ　齊藤俊子

ゆく船のけむりもけさはみゑぬまて
かちおさのみはたかくきこゑぬ　池江榮子

たちこむるかすみにけさは行く船の
かすみわたれるいよのうなはら　池江もと子

かすみ立つなにはの浦をみわたせは
かけもきゑゆくはるのうなはら　藤井うめ子

そてひちてあかす別れしさもさちの
こぎ行くふれのかけかすかなり　藤井芳子

磯ちかくこきゆくふれのあるならし
ふれはかすみのうちに入りけり　藤井薫子

うなはらは眠るはかりにかすみつゝ
かすむうちよりもるゝふなうた　市脇いち子

田子の浦たかれのおくもかすみそめ
おきに消ゑ行くふれもありけり　小倉小枝子

こぎ行くふれの見ゑすなりぬる

二月廿日兼題　婦人慈善會に入會を勸められたるに答ふる文

（以下原稿到着順）

天

岡山八番町　降田槇子

御水ぐきのあと、御なつかしう拜し參らせ候、さて、このたび設立の婦人慈善會のこと、細々と示し給ひしのみか、そが會則をも送り給はりし御心づくしのほど、身にしみて覺え候、まことに宣ふやう、婦女子の事業としては、此上なう似つかはしく、且規則も完全にて、こゝらあたりにては始めての事なれど、入會を申込まるゝ方々澤ならんと、推しはかり侍り、妾如きふつゞか者のまじらんは、いと〳〵心苦しうはづかはしき限りに侍れど、かゝるめでたき會をよそに見過さんも、さすがに本意なく口惜しう思ひ侍れど、御すゝめのまに〳〵、後へに加はりたく存じ候へど、御手數ながら入會の手續など、よきやうに取りはからはせ給ひてよ、萬は對面たまはりて聞え上ぐべくこそ、あなかしこ。

地

信濃國南安曇郡有明村矢野口方　松森まつ子

こゝよりはうと〳〵しう打過ぬるを、ふりはへての御せうそこ、とぢこめしまどの戸のすき間より、梅の初花のかをり入りたらんよりも身にしみて、嬉しうなん思ひ侍る。さて、慈善會入會のことゝも、ねもころに御傳へさせたまひあつきみこゝろのほど、忝なうなん、おのれも、かねてよりこの會のなり立にきて、入會せまほしく思ひ侍りしも、その頃は貴婦人かたのおほかりしより、みつからさしひかへ侍りしを、こたびの御すゝめにて、まちわひし花の盛りにあひぬる心地して、いとも〳〵嬉しうなん、とりあへすとゝけふみかいしたゝめ、御許まてれくり侍れは、御紹介の上、よしなにとりはからひたまひてよ、よろづはたいめのをりと、かいのこし侍る、あなかしこ。

人

大阪市西區立賣堀北通一丁目六十三番屋敷　日吉あさ子

春立ちしとは名のみにて、ふきくる風のすさまじく、火桶のそばのなつかしくいとさう〳〵しかりしに、なつかしき水ぐきのあとにこめさせられしあたゝかき御なさけに、さむさもいつしか忘られて、今そまことの春きし心地となり侍りぬる。御申しこしの浪花婦人慈善會の事、妾も人づてながら承り、いと望ましく、いかで委しき事をさぐり得て、君にも問ひ、共にと思ひ居しに、何事にもすばやき君の、規則書まで得たまひて、いつもながら先をこされ候事。うれしくも又はづかしうなん、よろづは君にまかせ侍れど、よきにはからはせ玉ひてよ、まづは御かへりごとまで、かくなん、かしこ。

佐々有鄰子

此ころかけてこし雁の玉章を、空の糸ゆふくりかへしながめはべりし婦人慈善會に入會はいかにと申越されつることばの花のうるはしさに、一しほゆかしくはべりしのみか、貴孃たちのひらきたまひし慈善のみちは、久方の天下にわたりていとひろきみちにしあなれば、妾ごときの深山木も、その數にくはへたまはらば、いともいともうれしきことのもとも大なるかぎりなんはべる、くはしき情は、御目にかゝりてこそ白し侍らめ、あなかしこ。

吉岡歌子

御文の趣畏り承りぬ、仰せの如く、心にもあらで、久しう音づれざりし無禮の罪は、さる方にみゆるし給ひてよ、實にや葉末の露だに、積れは淵となるてふものを、人毎に聊なりとも、救の資にあてたらんには、如何に多くの同胞を救ひうべからんとは、兼々存じながら、數ならぬ身の、さし出でゝ申上げんよすがなくて、打すぎ侍りしを、此度婦人慈善會の御設立、さながら日頃の望にかなひ、いといと嬉しうなん。何とぞ其會員の片はしに、御加へたまはりたく、とりあへず、御返事まで、かくなん、かしこ。

谷口ふさ子

懇なる御玉章たまはらせられ。いとも嬉しうこそ、人の災に逢へるを聞き、貧しきに困しむを見ては、いつも同情の涙に袖をぬらさぬ事侍らず、却說これらのあはれなる人どもは、世にたゆることなかめれは、いかでさる人どもを助け救はんすべもがなと。思ひ渡り侍れど、女の身にしあれば、何事も心のまゝにはならで、只口惜しうのみ空しく明しくらし侍りぬ、さるを、一日まうでしをり、婦人慈善會のこと承り侍れば、これまでの望をはたすは、實に此會にこそと、いと〳〵うれしく、直に入會したうも侍りしかども、父母の御意を伺ひて後にと、念しかへり侍りにき、この事を語りしに、父上にも母さまにも、いとよき事なりと許されたれば、入會して頃日の願をはたさんと悦び侍り、されば、いかでその會員の端に加はる事を得るやうに、御許樣より宜しく取計ひ給はんこと、くれくれも願ひ奉るになん。

藤の戸女史

きのふはしも、いとも、御心、せつなる、御文、給はり、いとゞ、嬉しく、存じ上げ、まつりぬ、承りはべれば、此ほど、雲の、上人の、ものせさせ、給ひぬる、御めぐみの、わざに、與せる、婦人、慈善會に、御許君も、とうより、御心入れ給ひて、おはしますよしにて、數ならぬ、身にも、その、まとゐ、に、入れよかし、と、ふかき、御心、つけ、下し給はり、いと〳〵、嬉しく、よろこばしき、限になん、妾も、日頃より、たらはぬ迄にも、いかにかして、かゝる、めでたき、事をも、心がけつゝ、居たれば、いなまんやうも、はべられば、御許君の、み心の、まに〳〵、よしなに、み、なし、はからひ、給ひて、あらまほしう、ひたぶるに、ねきまつるになん、あなかしこ。

香川つゆ子

昨日は、ふりはへて、御玉章たまはり、まことにありがたく、殊にこまやかにも、慈善會の入會を御勸め下され、かねてよりたのもしく、思ひ居り候折から、御懇なる御詞に、いかでか、いなひ奉るべき、母も非常によろこびきこゐ候へば、是非御世話下されたく、何れ明日參上仕り、久々の御無沙汰をも謝し、合せて入會の手續をもうかゞひ申したく存じ奉り候、御母上樣へも宜く御申上げ下されたく願上候、かしこ。

名取正代子

かしこみてきこゆ、かねて何がしの君たちのくはだて給ひし婦人慈善會、いよゝ世にひろめ給はんとて、こたび、又しも會員をつのり給ふとか、よりては、賤しき姿にも入會いたすべきやういひおこせ給ひて、ことに會則をさへそへて給はせたる、いと〳〵うれしうなん、おのれも、とくよりさおもひ侍るものから、いまだ學の業も淺く、何くれの務なども遠く姉君たちには及び難く侍れば、これよりわれがひいでさふらはんも、なか〳〵になこがましくはづかしくて、わざとさしひかへ侍りしを、御すゝめにあづかりぬるうれしさよ、されば次の會には、かならず御席の末をけがしまゐらすべく思ひ侍れば、おまへよきにおこなひ

給ひてよ、まづは御かへりごとかくなん、あなかしこ。

梅村うめ子

御許様には、不肖の妾を何くれと御いつくしみ下され、有り難き御草給はり、こよなううれしくこそ存じ侍れ、のたまひ越させられ候如く、當地に於て婦人慈善會を催すとか、風のたよりにもれきゝ御許様は、常々女子教育に御心を入れられ、殊に慈善の儀に厚くおはしませば御老のほどをも伺ひ候ひて、入會致さばやと存じ居り候折柄、却りて御許様より御誘ひの御文給はり、いと〳〵ありがたくうけたまはりまゐらせ候、かねての心がまへに候へば、何卒よきに御取りなし下されたく御願申上まゐらせ候、先づはおかへしまで、　あら〳〵かしこ。

賀屋蕗子

御消息給はり、げに嬉しさは、鶯の初音も、物かはと存ぜられ、封切るまも、もどかしう、拜し參らせ候へば、寒さの御障りもあらせられず、健かに物し給ふよし、此上なき事に存じ候、雲井はるかに渡らせ給へど、御眞心には露の隔てもなう、　ねもころに婦人慈善會入會の儀御すゝめ下されあつき御心のほど、身にしみて嬉しう存じ參り候、妾事もかねて其下心なきにしも侍らざりしが、積る年なみに、兩親のいたくうつろひぬれば、明暮のつかへ、家の雜事など、ふつゝかなる身一つにて受持ちまたゝくばかりの暇だに侍らず、本意なくなほざりに打過ぎぬるを、ようこそいさめ給ひつれ、早速御言葉に甘へ、萬事御依賴申上げ候まゝ、よしなに御取計ひ被下度偏に願上候、　あなかしこ。

河原芳子

御手紙見たてまつりて、御禮のこと〴〵承り侍り、いとゞはづかしうてなむ、さて先日御越しのみぎり、慈善會のことくはしく御はなしを承り候まゝその後父上に語らひて、入會致したしと思ひつゞけありしも、をりあしくてはたさずありしを、昨日御もとよりの御たづねにしほをにて、御手紙と規則などご見せ申して、父上にこひ候へば父上はよきことなりとすぐにゆるさせたまひたれば、うれしきまゝとりあへず文してかへりごときこえあげまゐらせつ、なほ明後日の日曜には、御家にまかりいで。くさ〴〵御かたらひ申すべくなん、かしこ。

高砂き代子

梅さく空の床しき折から、御うるはしき水茎、嘉ばしく拜し上げまゐらせ候、さて、此度御友どち打集ひ、御設け遊ばされ候婦人慈善會、ます〳〵御盛會の由、いく久しく目出たく祝ひ進候、次に御懇にも、妾事まで御誘ひ下され、こよなきうれしさ、誠に〳〵難有厚く御禮申上候、就ては、たゞちに宅へ相話し候處、宅にても御懇志の程打喜び、早速入會いたせとの事に候間、御言に甘へ入會致したく御願申上候、何卒〳〵宜しく御世話なし下されたく候まして、つたなき私事ゆゑ、會則もおぼつかなう不調法有之候はゞ遠慮なう御世話やき教へ下され候やう、くれ〳〵もねき參り候、猶ほ委しくは、後刻參上御目もじの上、萬御願申すべく候へども、先は取敢へず御返事まで、あなかしこ。

横山柳子

このごろは、わたくしことにのみかゝづらひ、たえてみけしきもうかがひはへらず、いかにおはしますらんとおもひたまふる折から、そをいかりもしたまはず、いとも〳〵ねもころなる玉章たまはりたるよろこばしさよ、そなたにても、時の御さりもなく、いそしみたまふとか、いともうれしうなん、さてもこたび婦人慈善會にわれも入會せんとおもへば、そなたにも、おなじこゝろはなきかさはりなくば、第二の日曜には、午后よりものせんに、手をたつさへてせきにのぞみたらんには、さこそたのしからめとの御ことば、いかでわれのいなみ申すべき、いつもわれをよき道にのみしをりしたまふことのうれしさよ、その日は、道も順なればこれよりおどろかしたてまつらん、日頃のおこたりをも、その折にきこえあぐべくなん。あなかしこ。

勝村ちか子

慈善の心は、をみなの第一の心にて、外つ國にては、はやうより婦人慈善會をひらき、世によるべなきものをあはれみ、さちなきものをたすくとこそ承り候へ、されど、わがみくには、かゝるめでたき會のいとすくなきは、こよなきうらみと存じ候ひしに、あなた様には、こたび當地の

慈善會に御入會あそばされ候よし、いとよきことゝ存じ參らせ候、就ては、妾にも入會のこと御すゝめ下され、いとうれしうぞんじ候、早速仰せに從ひ申すべく、諸共に貧しきをたすけ、あはれなるをいたはり候こと、いかにたのしからましと、存候、先は御かへりごとまでにかくなむあなかしこ。

亡き師を追想する文

神戸　竹里貞子

流れて早き飛鳥川、隙行く駒の足はやみ、四歳の春秋も過ぎしこそ、誠に一夜の夢の思ひなれ、哀れ玉鳴先生は、妾の物心おぼえし幼き頃より父とし仕へ、子としいつくしませ給ひ、十二の秋を迎ふるまで、萬にやさしく敎へ導き給ひし、其恩は、鳴の海より猶深く、不二の根よりも猶高く、仰ぎかしこみなつかしみて、晨に夕に、御齡の長かれかしと、神かけて只管祈りし物を、さても秋風に桐の葉なせる人の身よ、只かりそめの御いたづきの重り行き、六十路あまり五の坂を限りにて、あたら、うつし世を立ち去り給ひし事を思ひ出づれば、いと悲し、哀れ、其御病の床におはして、村雨そぼふる日、己を召して、ねもころに仰せ給へるは、やよ、なれよ、我が今はの一言を、能く、耳に留めよかし、そも今の世の人は、皆うはべの學問にて、枯木に造り花せしにことならず、いかで、目出たからん、よしや姿こそ深山がくれの朽木なれ、などか、心を花になさばならざらん、誘ふに易き水ありとても、稲船の心輕くて身を誤る事なかれ、智を磨き德を修めて、父君母刀自に能く仕へよかし、さらば、己も草葉の陰より、そを如何に嬉しく思はん、など、數々のたまひて、永き眠につき給ひき、

哀れ、其後は、其言の葉を耳に留め、うつろひ易き世の花の、仇なる色は目にも見ず、寒さに撓まぬ梅の操を心とし、晨の霜を手に拂ひ、夕の露を袖にさけて、矢竹心の一筋に、學びの業にいそしめど、何事も鈍き性は、いと甲斐なしや、哀れ、今猶世にましまさば、親しく御許に敎へを請ふべき事も多からんに、さかくしのすゝき忍びはつれば、思ひもいさゞ白糸の、縺るゝ胸は解くよしぞなき、哀れ、尊き御姿や今いづこ、懇ろなる數々の言の葉、今一度耳にするよしもがな、

船でせしきしのともしび影きえて
渡りわづらふわたのはらかな　　仝

偶感

こゞしき岩根をつたふ苔の下水も、流れてたゆまずば、末遂に青海原にそゝぐ日もあらんかし、哀れ五とせ六とせ昔より、漕ぎいでし學びの海よ、重なる八重の汐路の、はてしなく、立ちこむる霧のいと深し、競ひたつ荒波に、身は浮き船のゆられて、浮きつ沈みつ　賴むは楫の力のみ、師の君の導き給ふあかしのみ、　哀れ甲斐ある浦に至りつかん日はいつぞ　　仝

別友

小車のめぐりてしばしわかるとも
淀むこゝろはわれあらめやも
わかれては月をみつゝも忍はまし
ふけゆくよはにおもひやれ君　　久保井　くら子

初春河

うすらむのながるゝみれば春のきる
かすみはかはのおもよりやたす　　仝

野若菜

かぎりなくくる春ことにかぎりなく
つめどつきせぬ野のわかななかな　　田中ひろ子

國民

大君のふかきめぐみにうるほひて
生ひまさりけりくにのたみぐさ　　山田淳子

おりにふれてわがおもひを述ふ

たとへ身は越路の道にうつむとも
こゝろたゆましことの葉の道
すゝまなん事わさしげき世なりとも
ことの葉やまの花を見るまで　　小幡光江子

早春霞

またふゆとおもひしものをいつのまに
はるきにけらしかすみたな引く

歌集出版 豫約出詠募集延期廣告

貴顯大家題詠序跋　從八位　島多豆夫先生選

類題正葩集

全一冊○洋裝中形頗美本○紙數二百頁以上○正價金參拾錢○豫約特價貳拾錢○郵税四錢○郵券代用一割增○爲替杵築郵電局宛拂込ノ事

今回本會に於て明治歌人の詠歌を編纂し島多豆夫先生の選を經て本集を刊行し以て明治の歌集として永く後世に傳へんとす希くは江湖諸君金玉の詠を吝まず奮て投稿あらんことを

正葩集へは何人と雖も投稿する事を得べし

○○○○○投稿者注意○○○○○

●詠草は半紙に認め住所姓名雅號を詳記し三月十日限投稿あるべし●歌題は四季戀雜新題等隨意とす但短歌に限る●入花料短歌一首五厘宛●出詠一人十首以上制限なし（幾百首にても差支なし多數出詠する者は隨て多く選入する事を得べし）●出詠中優等者一等より三等迄は故島重老翁の眞筆短冊一枚づゝ四等より八等迄は故島重養翁（中頃重胤とも云へり）の短冊一枚づゝ九等より三十等迄は選者島多豆夫先生の短冊一枚づゝ呈贈す

●豫約出版法○○○○○

豫約申込期限三月末日限●豫約申込は總て前金を要す期限後は正價に復す●製本出來期限は五月末とし申込順序により送本す●廣告料一頁貳圓●豫約及出詠共御申込の方へは島重老島重養島多豆夫三大人の和歌を集めたる櫛の舍三代歌抄なる一書を添呈す

豫約申込出詠届所　出雲國杵築町　正葩會

編輯主任兼責任者　正葩會主　島宮太郎

明治歌集 類題正葩集

○編纂に就て

今回類題正葩集編纂に付原稿并豫約募集の義新聞雜誌を以て廣告候處非常に應募者有之一月末日迄八千余首の出詠を得候に付順次選者に差出し選擇を受居候然るに何分多數の事には有之且つ出版に就ては諸大家の題辭題詠序文等を乞ひ石版摺として卷首に挿み又櫛の舍三代歌抄にも同樣題辭題詠序文の石版摺及び重老重養多豆夫三大人の眞蹟を寫眞銅版摺として添付するなど頗る手數と日子とを要し殊に寫眞製版印刷の如きは之れを東京に仰がざるべからず爲に一切の準備を終り愈印刷に付するは二三ヶ月の後たるべしと存候就ては出詠の義は三月十日迄に御送附の分は選入可致候間御門下御知己御誘導多々御出詠の上本集を大成せしめられん事切望に不堪候尚製本洋裝小形と廣告致置候處選歌意外に多數と相成候に付洋裝四六版美本に改定致候

○入花料に就て

入花料は詠歌選擇の勞に酬いん爲め選者に差出す者なりやと御尋に預り候向も有之候處決して左にあらず該集纒の入花料を以て櫛之舍三代抄といふ一冊を印刷して出詠を豫約と并せ申込れたる方に限り進呈せんとの考より斯く入花料を規定したる次第然るに前述の如く意外にも出詠多數に及び隨て入花料巨額に達したるを以て可成完美の冊子を製して進呈可致候間益進みて出詠及豫約の申込あらん事を乞ふ

類題正葩集
編纂主任　出雲國築杵町　島宮太郎

孝明天皇御遺德

先帝御製御歌挿入　全壹冊　●實價廿五錢郵稅四錢●

恭く按するに先帝孝明天皇は曠古の明君なり不幸にして**聖德事蹟**尙湮晦に屬し未だ外に露れず是頗る憾むべしと爲す此書は宸翰秘書及先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の談に依り以て汎く**事蹟實歴逸聞**を網羅したるものにして庶幾くは聖徳の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず今試みに本書の一班を示さむ左の如し

御一代の章を揭げ編年体を以て降誕より崩御に至るまでの事迹を示し

聰明の章に於て先皇の英明絶倫なるを概説し

夙成の章は御幼時の御言行を示し

慷慨の上編は醜夷猖獗の事其下編は皇權回復の事に痛く叡慮を惱されたる事蹟を叙し

孤憤の章は獨り至尊をして社稷を憂へしむの實情を寫す

撫御は識見卓出の實際を明らかにし

豁達は言路洞開の聖徳を輝かし

忍耐は襟裡荒廢供御菲薄にして時に或は十兩以下の御座用金に窮し給へる等の例證を示し

仁愛は惻隱仁恕の御心甚だ厚かりしを明にす

前數章に配置する能はざりし逸事遺聞は總て之を**雜事**の一章に網羅し以て**先帝の聖德を頌し奉る**

國民たるものゝ必讀すべき良書なり

東京京橋區築地二丁目廿一番地　(電話新橋八八)

行所　**國光社**

三輪田眞佐子著

女子教育要言　全

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化育の良績は夙に女子教育社會の推重敬服する所今敢て喋々を要せざるなり女史嘗に女子の本分を著はして我國婦女子たるべきものゝ標準を示し女子處世論を著はして女子の身を處するの方法を述べらる本社之を世に公にするや忽ち高評を博し從て印刷し從て賣盡し既に七版に及ぶ其の如何に世に重せらるゝかを知るべきなり女史今又本書を著し以て我國の婦女子が如何にして其本分を盡すに足る資格を養ひ如何にして其身を處するに足る技術を練らんかを述べらる蓋し世間女子教育の論尠からずと雖多くは教育者の注意を促すを目的とするものなれは此等は廣く讀者を益せざるを憾とす本書は教育の方法に止まらず婦女各自の訓戒となるべき義理を撰び叮嚀親切に説き論されたるを以て獨り教育者のみならず廣く女學生は更なり兒を懐く婦人と雖針をもてる少女と雖苟も我國の婦女子たるものは必之を讀まざるべからざるの良書なり今左に其目次を掲ぐ其の詳細は本書に就きて之を見るべし

女子教育要言目録

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　國光社

肝付海軍大佐題辭　小笠原海軍大尉序文及作歌
伊東海軍中將手翰　木村海軍大尉校閲

●●西主一
野口衞佐美合著

訂正三版

新案海軍遊戯法

菊版美本
詳圖入
全一册
定價金二十錢
郵税金四錢

本書は我海國男子を養成するに最も適切なる良書にして其の要旨を海戰に擬したる兒童の遊戯法を至極面白く簡易にしつ明瞭に解きたるものなり世の父兄たるもの宜しく一本を繙て以て家庭の資とすべき有益の書なり

●●●學校用としては殊に妙なり●●●

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　國光社

大日本體育會々長陸[illegible]
仝副會長貴族院議員大山作樂君寄[illegible]
陸軍憲兵大尉隈元實道先生著

體育演武必携　全壹冊

三版

定價貳拾錢郵稅貳錢郵券代用一割增

編中には左圖の如く一々圖解を附け又至極讀み易き文字を以て說き明したれば學校生徒にても其外誰之を讀まむ劍術と柔術の奧意を詳く飲み込むこと容易なり



本書は劍術柔術の基本に加ふるに兵式號令を以てし先生が日常門生に訓練せらるゝ所のものを懇切に說明せられたるものなり故に本書を熟讀する時は場裡十年の苦行は僅々數旬にして卒り速に豁達自在の域に至ることを得べし

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　靜思館

社告

〇代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通送にて本社へ御直送の事〇郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候〇郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事〇別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事〇本誌掲載の寄書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價	
一冊	十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢
十二冊前金（半年分）	壹圓
全國無遞送料	

廣告料
五號活字廿三字詰一行金二十錢

明治三十二年二月廿一日印刷
同年二月廿二日發行

編輯兼發行人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衞

印刷人　東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木艮雄

發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地（電話番號新橋八六）　國光社

男爵高崎正風先生序　本居豐穎先生序

故富士谷御杖先生述

土佐日記燈

本書發行の由來

富士谷御杖の翁斯の道の學に至り深かりしは今更にいはずそのものせられし著書はれかるが中に燈といふもの古事記燈、萬葉集燈は翁か在世の頃に名り卷となりて、世に廣こりしも、この土佐日記燈は早く文化の末つかたになれるものなるかさるよしありて時の粟田の宮の請はせらるゝに稿本のまゝ、奉られしを、後いくはくも、なくて翁はみまかれしかは、さなからに埋もりて流布せずなりにき、世の學者見まほしくふすれとも、さるよしもなくて空しく年經ぬること茲に數十年、さるを翁の男元廣ぬしかさるべき筋より辛うして寫し傳へたるを、いとうれしくて、こたひ我社にものして、摺り卷廣く世に流布せしめてんとす抑々此燈は世にありふれたる註釋書の類とはことにして、貫之朝臣のこの日記を書かれしはかりそめのすさびにあらず、土佐の守に任されしを深く憤る由ありて、わらはには女のものせしさまになし深き心の言葉のうちに、ふくめたりといふを、本として言詞は更なり文意をもいと委しく解なしなからいと廣く考證をも引き出でられたり

菊版 大和綴製本頗美麗

全 自一卷至八卷 壹千五十頁 一合三冊

正價金一圓五十錢
遞送料 四種郵便三十錢小包十里迄七錢百里迄十二錢百里以外廿四錢

謹告

本書發行の儀屢に廣告せしより續々御注文に接し候處差支これあり製本に意外の日子相費し申候今回完く整頓相告げ茲に發賣致候大方の君子陸續御注文あらんことを

發行所 東京京橋區築地二丁目 國光社

賣捌所 各府縣書肆

最寄書肆に無之時は直接本社へ御注文被下度候

(印刷所東京國光社印刷部)

(明治二十四年八月四日內務省許可)
(明治二十五年三月十二日遞信省認可)